



公益社団法人日本臨床細胞学会

細胞診専門医会 会報

No.61 June2025

目次

公益社団法人日本臨床細胞学会 理事長挨拶	岡本 愛光	2
第 65 回日本臨床細胞学会総会・春期大会の主宰を終えて	森井 英一	4
第 63 回日本臨床細胞学会（秋期大会）を終えて	進 伸幸	6
第 66 回日本臨床細胞学会総会・春期大会の開催にあたって	田畑 務	9
第 64 回日本臨床細胞学会（秋期大会）を広島で開催します!!	有廣 光司	10
学会賞を受賞して	佐藤 之俊	11
<地方会便り>		
石川県臨床細胞学会の地域活動報告	湊 宏	13
<細胞検査士会便り>		
第 87 回細胞検査士ワークショップを終えて	佐々木健司	15
2024 年度細胞診専門医資格認定試験を終えて	近内 勝幸	17
第 57 回細胞検査士資格認定試験を終えて	三上 芳喜	18
<細胞診専門医の輪—先輩・同輩・後輩>		
私と細胞診 —血液細胞より始まったさまざまな出会い—	井上 健	20
<細胞診専門医・指導医駆け出しの頃—青春を語る>		
振り返れば、そこに青春	覚道 健一	23
<国際交流>		
第 21 回日韓細胞診合同会議のご報告	内藤 嘉紀	28
第 29 回タイー日本細胞診ワークショップ（TJCWS）に参加して	新野 大介	30
第 29 回タイー日本細胞診ワークショップに参加して	藏本 純子	31
カンボジア医療交流 2024 年度活動報告	若狭 朋子・他	33
<新専門医紹介>		
細胞診専門医試験に合格しました	渋谷英里子	35
細胞診専門医試験を受験して	平川 奈美	36
2023 年度細胞診専門医試験に合格して	大野 淳也	37
<追悼>		
東岩井 久 先生を偲んで	伊藤 潔	38
WHO 細胞診 Blue Book 第 3 弾「リンパ節・脾臓・胸腺」刊行のお知らせ	細根 勝	40
2025 年度細胞診専門医資格更新について	近内 勝幸	42
2025 年度細胞検査士資格更新申請について	井上 健	43
日本臨床細胞学会 細胞診専門医会総会議事録		
細胞診専門医会 総務・各種構成委員会メンバー		
細胞検査士指導要領		
公益社団法人 日本臨床細胞学会細胞診専門医会に関する施行細則		
編集後記		



公益社団法人日本臨床細胞学会 理事長挨拶

公益社団法人日本臨床細胞学会 理事長
(東京慈恵会医科大学産婦人科講座)

岡本 愛光



当学会公益社団法人化10周年を記念して、広報活動を行うよう佐藤之俊委員長よりご依頼をいただき、当初は新聞やテレビ、駅での広報を検討しておりましたが、現在の若年層においては、50歳以下では新聞を読まない方が多く、20～30歳代はテレビさえも視聴しない傾向があります。そこで、誰をターゲットにすべきかを再考し、将来細胞診に携わる可能性のある10代の若年層とその親世代に焦点を当て、彼らに細胞診に興味を持ってもらうことを目的としました。

医療従事者向けには、日本臨床細胞学会への関心を高め、細胞診専門医や細胞検査士の重要性を広く認知させることを目指しました。一方、一般の方々には、がんなどの早期発見や治療に貢献する細胞診についての理解と認知を深めることを目的とした広報活動を企画しました。

その一環として、細胞の写真をアート作品として展示し、参加者が自分自身の細胞を顕微鏡で観察できるワークショップを開催しました。さらに、Webサイトでは、身体の細胞をクルーズするように観察し、楽しみながら細胞について学

ぶことができる「細胞アート展」を企画しました。このイベントは6月9日（日）に大阪国際会議場で、森井英一春期大会長のご協力のもと開催され、累計来場者数150名以上、ワークショップ参加者数54名という大変好評を博しました。さらに、第2回は8月4日（日）に東京慈恵会医科大学で開催され、事前応募者数1,511名、来場者数約200名、ワークショップ参加者数90名と、こちらも大成功を収めました。

「細胞アート展」は時事通信、共同通信、Yahoo! ニュースをはじめとする10以上のメディアに取り上げられ、SNSでも累計15万インプレッションを記録しました。特に、小学校4年生から中学校1年生が参加者の2/3を占め、下は幼稚園児、上は高校2年生までが参加し、保護者の方々も35歳から70歳代まで来場されました。

参加者からは「高校生向けのワークショップは非常に貴重であり、医療に興味を持ち始めた子供にとっても貴重な機会だった」との声が寄せられました。また、「初めての内容でドキドキしましたが、とても楽しめました。難易度もちょうどよく、親切に教えていただけたので保護者も楽しめました」という感想もいただいております。特に「自分の細胞を見ることができた体験が非常に興味深かった」との声もありました。

また、イベントスタッフとして活躍してくれた医師、検査



細胞アート展（大阪にて開催 6月9日（日））

士の方々、そしてその知的で穏やかな姿に強い印象を受け、「勉強を頑張れば、あのような素敵なお姉さんやお兄さんになれるのだと感じました」といった感想や「多くのスタッフの皆様の手厚いサポートにより、無料イベントとは思えないほど濃密な経験をできた」という嬉しいお言葉も頂戴し、大変喜ばしく思いました。

この成功の裏には、30回を超える Web 会議を通して熱心

に企画してくれた野上祐介先生をはじめとする若手医師や検査士の努力がありました。また、イベント運営において多くの実績を持つ飯嶋さんをはじめとした株式会社 kushami の方々にも心から感謝申し上げます。若手の斬新な発想とプロフェッショナルな運営力が見事に融合した今回の企画に対して、心から称賛の意を表したいと思います。この「細胞アート展」は今後も継続していきたいと思っています。



細胞アート展（東京にて開催 8月4日（日））

第 65 回日本臨床細胞学会総会・春期大会の主宰を終えて

第 65 回日本臨床細胞学会総会（春期大会）会長
（大阪大学大学院医学系研究科 病態病理学・病理診断科 教授）

森井 英一



2024 年 6 月 7 日（金曜）から 9 日（日曜）まで、大阪府立国際会議場にて第 65 回日本臨床細胞学会総会・春期大会を、井上健先生、若狭朋子先生を副会長に、植田政嗣先生を顧問に迎え、開催させていただきました。大阪での開催は植田先生が行われた春期大会以来 7 年振りでした。植田先生が会長をされた時から今までの間に COVID-19 パンデミックがあり、世の中はかなり変わりました。特に ICT の向上は目覚ましく、今回の大会も特別講演やシンポジウム、ワークショップ、教育講演、要望講演などの内容を録画し、後日にオンデマンド配信することができております。従来は同時時間帯の講演のうち 1 講演しか聴くことができなかったのですが、オンデマンド配信では時間的に重なっている複数の講演を視聴することができるというメリットがあり、参加者にとって視聴する意義のあるプログラム内容を組むことが求められます。プログラム委員長の河原邦光先生を中心にコアプログラム委員会のメンバー、全国プログラム委員会のメンバーが知恵を絞り、最先端の知識から日々の業務に役立つ内容まで多彩なプログラムを揃えさせていただくことができました。本学術集会のメインテーマは「多様性が育む細胞診の未来」です。まさにプログラム内容も多様性が重視された内容にすることができたと考えます。

上述のように本大会のメインテーマは「多様性が育む細胞診の未来」です。このテーマを考えた時は現在のように多様性があちこちで叫ばれる時代が来るとは思っていませんでしたが、日本臨床細胞学会こそ多様性の塊だと考えております。職種でいえば臨床検査技師と医師、診療科でも婦人科、外科、内科、口腔、病理など多様性に富んだ集団です。この多様性こそが細胞診の未来を支えることができると考えております。人工知能、ゲノム医療、細胞生物学、業務自動化、テレサイトロジーといった研究や技術の最先端を現場に応用し、日々の診療に役立てることも重要であり、細胞の形態をみて良性か悪性かを判断することも医療の根幹を握る重要なことです。さまざまなバックグラウンドと技術、技量、実践力を有した人材が一堂に会して、細胞診の未来を盛り上げていける大会になればと考え、このテーマを設定しました。

特別講演、会長企画、シトラス研究報告会、精度管理アドバイザー講習会、医療倫理・感染対策・医療安全セミナー、スライドカンファレンスなどに加え、14 のシンポジウム、10 のワークショップ、14 の要望講演、14 の教育講演、16 のスキルアップ企画が組まれました。特にスキルアップ企画は、前回大阪で行われた第 58 回総会で植田先生が立案されたもので、業務の現場で求められる明日から役立つ内容をシリーズとして講演され、多くの立ち見が出る企画でした。今回もコアプログラム委員からの熱い要望があり、第 2 会場で会期中を通して行ったところ、比較的広い会場であったにも関わらず、やはり立ち見の出る人気講演シリーズとなりました。また、一般演題として 320 演題と近年にない多くのご登録をいただき、2 会場に分けてご講演いただきました。数多くの皆様に現地にご参加いただき、COVID-19 感染症後の現地参加を待ち望んでおられた会員が多かったということを実感しました。オンデマンド配信期間中も含めれば、最終的には 7706 名の皆様にご登録いただき、配信には 7662 名もの会員の皆様にログインいただきました。多くの皆様にご参加いただけたこと、この場を借りて深く御礼申し上げます。

企業展示の会場を参加者のチェックインカウンターと同じイベントホールに設定したことや昨年の第 64 回春期大会長である藤井多久磨先生が考案されたスタンプラリーを今年も継続して行ったこともあり、企業ブースにも多くの参加者に訪れていただき、出展企業からも好評でした。ただ、ランチョンセミナーが全部で 10 個しか企画できず、整理券が配布開始後 30 分で底をついてしまったことが反省点です。COVID-19 感染症は 5 類になったとはいえ、多くの医療機関ではマスク着用が求められ、病棟でもしばしばクラスターが発生する状況であります。そうしたことを鑑み、会員懇親会は開催せず、土曜に会員の夕べを無料開催し、軽食やワイン、ビールなどをご用意いたしました。会員の夕べで 0 次会を行い、その後、近隣の福島や天満、中崎町、堀江といった居酒屋やカフェの立ち並ぶエリアに出かけられた皆様も多く、会員どうしの懇親の場のきっかけとなったようです。

日本臨床細胞学会が公益社団法人化されて 10 年を迎えたことを記念した「細胞アート展」が日曜に 12 階の眺めのいいホワイエで開催されました。この企画は、佐藤之俊前理事長を委員長とした公益社団法人化 10 周年記念事業検討ワーキンググループの中で、岡本理事長がリーダーシップをとら

れている広報チームを中心に実施されました。当日は曇天だったのですが、多くのお子様と保護者の方々が参加され、細胞の形などに親しんでいただき細胞診の重要性と知名度向上に役立つことができたと思っております（写真参照）。

大会期間中は金曜、土曜が快晴でした。日曜は天候が崩れるという予報でしたがそれほど大きな影響はなく、むしろ曇っていたために気温がやや低下して過ごしやすいという声もありました。本学会では大学スタッフに加え、日本臨床細胞学会近畿連合会の皆様、特に大阪府支部の皆様を中心にお手伝いをいただきました。ここに改めて御礼申し上げます。



細胞アート展の様子



学術集会集合写真

第 63 回日本臨床細胞学会（秋期大会）の開催を終えて

第 63 回日本臨床細胞学会（秋期大会）大会長
（国際医療福祉大学医学部産婦人科）

進 伸幸



第 63 回日本臨床細胞学会秋期大会を、2024 年 11 月 16 日～17 日に幕張メッセ国際会議場・東京ベイ幕張ホールにおいて開催させていただきました。日本臨床細胞学会の会員、細胞診専門医の先生方の多大なご尽力とご協力を賜り、有料参加登録者総数は 6,134 名（会員 5,142 名、非会員 67 名、学生 29 名）に至りました。実行委員や千葉県臨床細胞学会の細胞診専門医・検査士の先生方 100 名弱に受付業務などを担当いただきました。現地参加者は 2,184 名で、2 日間で延べ 3,150 名 + α の方々が会場に足を運んでくださり、活発な質疑応答がなされました。企業展示も 41 社から参加いただき、ポスター会場と一体となって大変な盛況ぶりでした。また、Web でのオンデマンド配信は、2024 年 12 月 2 日から 27 日まで行い、4,881 名（全参加者の 79.6%）にアクセスしていただきました。総ページ閲覧数は、43,740 回に及びました。厚く御礼申し上げます。

千葉県での日本臨床細胞学会の学術集会開催は、2021 年 6 月の第 62 回臨床細胞学会春期大会（学術集会大会長：千葉大学大学院医学研究院産婦人科学講座 生水真紀夫先生）以来 3 年ぶりでした。千葉県臨床細胞学会の関係者の方々のご協力を賜り、また千葉県産科婦人科医学会、千葉市から、寄付金や助成金など財政的な支援もいただきました。企業や団

体、個人からも多くの援助を賜り、何とか赤字にならずに、会員や専門医の先生方に、学術的な内容、また交流の場の提供という点で最大限に還元できたと考えております。

学術集会のメインテーマは、「細胞診の現況と展望～細胞を見る、診る、究める～」として、形態学は無論のこと、免疫細胞化学、免疫組織化学、インサイチュハイブリダイゼーション、プレジジョンメディスン、ゲノム医療、シングルセル解析、whole cell imaging などの new technology、AI の応用、HPV 検査を用いた子宮頸がん検診の実践など、日進月歩の技術やコンセプトを多く取り入れたプログラムとしました。コアプログラム委員の先生方、また全国のプログラム委員の先生方のご協力の賜物です。紙面の関係上、コアプログラム委員の先生方をご紹介します。副会長：田中尚武先生（千葉県がんセンター・副病院長）、潮見隆之先生（国際医療福祉大学医学部病理・病理診断学 教授（代表））、顧問：長村義之先生（日本鋼管病院病理診断科 部長）、佐々木寛先生（千葉徳洲会病院婦人科 部長）、青木大輔先生（国際医療福祉大学大学院 教授）、生水真紀夫先生（千葉大学真菌医学研究センター進化生殖学 教授）、プログラム委員長：高松潔先生（東京歯科大学市川病院産婦人科・現つくばみらい遠藤レディースクリニック 顧問）、プログラム副委員長：片岡史夫先生（国際医療福祉大学医学部産婦人科学 准教授）、加藤拓先生（成田富里徳洲会病院病理診断科・現湘南藤沢徳洲会病院臨床検査部病理）、実行委員長：永松健先生（国際医療福祉大学医学部産婦人科学 教授（代表））、実行副委員長：片岡史夫先生（国際医療福祉大学医学部産婦人科学 准教授）、



片山博徳先生（国際医療福祉大学成田保健医療学部医学検査学科 教授）、事務局長：岡田智志先生（国際医療福祉大学医学部産婦人科学 准教授）。ご多忙の中、一緒に学術集会を企画・運営してくださり、深く感謝申し上げます。

プログラムの内訳は、海外招請講演1題、特別講演4題、要望講演13演題、教育講演13題、シンポジウム15セッション73題、細胞検査士会要望教育シンポジウム1セッション3題、ワークショップ13セッション69題、一般ポスター演題221題、会長特別企画1セッション8題、グローバルアジアフォーラム1セッション4題、スライドカンファレンス1セッション6題、基礎講座シリーズ16題、医療安全・感染対策・医療倫理の各講習会3題、細胞診専門医セミナー1セッション2題、精度管理アドバイザー講習会1題、市民公開講座1セッション5題、地域推薦演題5セッション16題、わからん会1セッション5題、ランチョンセミナー10セッション16題、計471題となりました。海外招請講演は、Liron Pantanowitz 先生（Chair Department of pathology, University of Pittsburgh）より「Digital Cytology and AI: Message for the future」についてご講演いただき、特別講演は、中釜斉先生（国立がん研究センター 理事長）より「全ゲノム医療体制の構築に向けて」について、河上裕先生（国際医療福祉大学医学研究科 教授）より「腫瘍免疫学に基づいたがん免疫療法開発の進展」について、青木大輔先生（国際医療福祉大学赤坂山王メディカルセンター 院長）より「対策型検診としての子宮頸がん検診」について、古川俊治先生（参議院議員）より、「人口減少・少子高齢化の進行と医療・介護政策の方向性」について、大変内容の濃いご講演をして

いただきました。オンデマンド視聴のアクセス数も多く、最新の話題について会員にとって得るものが大きかったと思われます。会長特別企画として、安田政実先生（埼玉医科大学 国際医療センター病理診断科 教授・現岐阜赤十字病院病理部）、山下博先生（国立病院機構東京医療センター産婦人科科長）に「細胞診従事者の働き方は変わるのか？ ～新たな子宮頸がん検診の普及を見据えて～」と題して、さまざまな立場の8人の演者にHPV単独法による子宮頸がん検診の導入に際しての問題点などをdiscussionしていただきました。シンポジウム、ワークショップは各領域における最新の技術や研究内容・診断困難症例などについての講演や討議が行われました。基礎講座シリーズは、阿部仁先生（がん研究会有明病院臨床病理センター 技師長）、澁木康雄先生（国立がん研究センター中央病院病理診断科/臨床検査科）に16分野にわたり企画していただき、立ち見の会員も見られ盛況でした。スライドカンファレンスは、長尾俊孝先生（東京医科大学人体病理学分野 主任教授）、加藤拓先生に6領域からバーチャルスライド（HP事前掲載）にて出題いただき、活発な討議が行われました。Global Asia Forumは山口倫先生（長崎大学病院病理診断科・病理部 教授）、西野幸治先生（新潟大学医歯学総合病院産婦人科）、片山博徳先生に4領域から海外よりリモートで結んで討議していただきました。細胞診専門医セミナーでは、細胞診専門医会青木大輔会長の座長の下、若狭明子先生（近畿大学奈良病院病理診断科 教授）と森定徹先生（杏林大学医学部産科婦人科学 教授）から、子宮頸がん検診プログラムの精度管理における精密検査のあり方について、それぞれ病理医、婦人科医の立場からご講演いただきました。精度管理アドバイザー講習会では、HPV検査単



現地開催を終えて（実行委員の先生方・教室の先生方とともに）

独方の検診プログラムの精度管理について、森定徹先生より詳細なご講演をいただきました。一方、市民公開講座として、高松潔先生に「増えている子宮体癌— あなたは大丈夫？」と題して、女性医師2名、子宮体癌患者2名、若年子宮体癌患者担当の進伸幸より5演題発表があり、多くの市民の方々の参加をいただき、会場が一杯になるほど盛況な中でリアルな声を聞くことができました。子宮体癌の症状、診断、治療についての啓発活動として有益であったと思います。また、「細胞アート展」が、岡本愛光理事長のご尽力にて開催され、約50組の親子の方々に参加いただき、細胞診の実際の体験を通してその魅力を堪能していただきました。学会初日の夕方には、3年ぶりとなる会員総懇親会も開催でき、各種出し

物を楽しみながら会員相互の親睦や交流を深めることができ、改めて現地開催での face to face での情報交換が重要であることを実感しました。

このように多くの会員の先生方に支えていただきながら、細胞診の現況と展望について、理解を深める場を提供することができ、改めてご参加いただきました会員の皆様に厚く御礼申し上げます。学術集会運営上至らぬ点もあったかと存じますが、この場をお借りしてお詫び申し上げます。次回の第66回春期大会は東京女子医科大学産婦人科学講座教授の田畑務先生が担当されます。細胞診の「次のステージ」でまたお会いしましょう。

第 66 回日本臨床細胞学会総会・春期大会の開催にあたって

第 66 回日本臨床細胞学会総会（春期大会）会長
（東京女子医科大学産婦人科学講座 教授・講座主任）

田畑 務



この度、第 66 回日本臨床細胞学会総会・春期大会を担当することとなりました東京女子医科大学・産婦人科の田畑務と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、本会は 2025 年 6 月 27 日（金）～ 29 日（日）の 3 日間、新宿・京王プラザホ

テルにて開催させていただきます。本学術集会は現地開催を主に、教育講演・要望講演などは何度でもお聞きいただけるオンデマンド配信を行う予定です。奮ってご参加いただきますよう、何卒よろしくお申し上げます。

2024 年 4 月から子宮頸がん検診に HPV 検査単独法が導入され、細胞診の在り方も大きく変わりつつあります。また、膀胱がん・乳がんでは細胞診は診断だけではなく、摘出範囲を決めるなど、がん治療にはなくてはならないものとなりました。さらに、ゲノム診断も細胞診に加味され、細胞診は次のステージへ進もうとしています。そこで、本学術集会のタイトルを「細胞診、さあ行こう！ 次のステージへ」とさせていただきました。本学術集会におきまして、細胞診に携わるすべての領域で討議していただき、細胞診が次のステージに飛躍する足がかりになればと考えております。

さて、HPV 検査単独法では LBC 検体を用いて、まず HPV 検査を行い、陽性となった場合に細胞診が行われます。また、LBC 検体は検鏡範囲が狭くスクリーニングが簡便で、子宮頸がん検診に最適な検体採取法です。これからの子宮頸がん検診では LBC 検体であることが必須となることが予想されます。そこで、本学術集会では「JAPAN LBC 宣言」として、日本臨床細胞学会をはじめ、日本産科婦人科学会、日本産婦人科医会、日本婦人科腫瘍学会、日本婦人科がん検診学会の 5 つの学術団体が共同で、「婦人科がん検診においては LBC 検体を用いるべきである」との共同声明を発表したいと考えています。そして、これらの学会を代表する先生方にご講演いただき、HPV 検査単独法についての議論を深めていきたいと思っております。これまで、子宮頸がん検診では、細胞診にて HPV 感染細胞を見つけようとしてきましたが、HPV 検査単独法は HPV 陽性症例の細胞診が対象となり、か

なりの方向転換となります。また、日本臨床細胞学会では 2023 年度より「子宮頸がん検診における細胞診判定のあり方に関するワーキンググループ」を立ち上げ、HPV 陽性検体の NILM、ASC-US 以上の判定基準の作成に取り組んできました。本学術集会でその成果を発表し、HPV 検査単独法を含めた子宮頸がん検診における細胞診の診断方法について、細胞学会としての指針を示していければと思います。そして、子宮頸がん検診における精度管理について、HPV 検査単独法による子宮頸癌検診マニュアルの中に記載されている 4 種類の機関；①検体採取機関、② HPV 検査判定機関、③細胞診判定機関、④確定精検実施機関、での精度管理、さらには、結果報告体制などの在り方を討議していただく予定です。

本邦では、働き方改革が進み、女性細胞検査士の働き方も重要となってまいりました。そこで、「子育て応援プロジェクト」として、女性細胞検査士の方の現状と問題点を討議していただき、女性細胞検査士の働き方改革につなぐことができればと思います。

海外招請講演では、スウェーデンの Jiajiao Lei 先生より「HPV ワクチン」について、世界の現況をお話しいただく予定です。Lei 先生はスウェーデンの HPV ワクチンプログラムの成果を New Engl J Med にご発表されたことで有名で、ご講演を非常に楽しみにしています。

特別講演には、東京海洋大学名誉博士のさかなクンをお招きし、「～夢へ向かってレッツ・ギョー！～」と題したご講演を予定しています。さかなクンが魚に関する知識を極められた、夢にあふれるお話を、皆さんと一緒に聴きたいと思っております。

その他、要望講演 8 題、教育講演 14 題、シンポジウム 13 題、ワークショップ 14 題、スライドカンファレンス、Global Asian Forum、市民公開講座、医療安全セミナー、医療倫理セミナー、感染対策セミナー、精度管理アドバイザー講習会、会長講演、市民公開講座などを予定しています。

梅雨時の日本臨床細胞学会学術集会ではございますが、京王プラザホテルは新宿駅から雨にぬれずに行くことができます。是非、多数の皆様にお越しいただき、本会を盛り上げていただければと存じます。何卒よろしくお申し上げます。

第 64 回日本臨床細胞学会 (秋期大会) を広島で開催します !!

第 64 回日本臨床細胞学会 (秋期大会) 会長
(広島大学病院病理診断科 教授)

有廣 光司



2025 年 11 月 29 日 (土), 30 日 (日) の二日間, 広島国際会議場・広島市文化交流会館において第 64 回日本臨床細胞学会秋期大会を開催致します。多くの学会員の皆様にご来広の上, 学会にご参加いただきますようお願い致します。

学術集会のテーマは「シン・細胞診—変化と進化を求められる今, 私たちは何をすべきであろうか?—」です。細胞診専門医の先生方と細胞検査士の方々を含む大部分の学会員は細胞診に大きな変革の波が押し寄せていることを肌で感じておられると思います。がんゲノム解析のみならず, 遺伝性代謝異常症や心臓血管疾患において当該原因遺伝子の異常をホストから採取された微量の細胞を用いて行う時代が到来しました。AI を用いた digital cytology は確実に進歩を示し, 定量性解析においては人間よりも精度の高い検索が可能になりました。一方で細胞診や病理診断に対する精度管理ないし検体管理体制の構築が求められ, 医療の現場においてもこれらに対するきめ細かな対応が必須になってきました。

このような現在の医療環境と社会情勢の中において, 学会のテーマの「シン」には多くの同音異義漢字を想起させ, 豊かなイメージを生成する力を託しました。最も重要な言葉は「新」であり, 「芯」, 「進」, 「深」, 「伸」, 「真」, 「振」などの言葉が当てはまると思います。すなわち従来からの形態診断という core「芯」を大切に「深化」しつつ, 「新規」の技術を取り入れ「進化」と「伸展」を示し, 医療に貢献する「真」に新しい細胞診を提案し, 議論し, その結果として大きな「振幅」の変化が現れ, 発展する端緒になることを期待しています。

現時点で, 決定している演題をいくつかご紹介します。

特別講演は呉市海事歴史科学館 (大和ミュージアム) の戸高一成館長にお願いしました。内容としては, 当時の工業技術の粋を結集して建造された戦艦大和を通して, 日本がどうしてそのような高みに到達できたかを解説いただき, 現在の日本の経済, 産業のみならず医療も含めた問題点を明らかにし, 将来への指針を示していただくようお願いしています。また, 放射線影響研究所の神谷研二理事長には広島と福島の放射線障害対策の過去と未来についてご講演をいただきます。

現在, 学術集会開催に向けて鋭意準備に取り組んでおりますが, シンポジウムやワークショップの内容は編成中です。今まで本学会では講演や発表をされていない演者を可及的に探して, 新しい話題や技術的進歩を共有できるように企画したいと思います。

以前にも書きましたが, 広島での日本臨床細胞学会の学術集会開催は広島大学医学部産婦人科教授 藤原 篤先生が 1988 年 (昭和 63 年) 11 月に第 27 回日本臨床細胞学会秋期大会を主催されて以来, 実に 37 年ぶりの開催であり, 多くの会員及び非会員の方々のご参加を広島県を挙げて心待ちにしています。2025 年には広島駅再開発も完了し利便性も格段に向上します。加えて学会場のすぐ近くには J リーグサンフレッチェ広島のサッカースタジアム・エディオンピースウィング広島があり, 試合が行われない日でもレストランやショッピングが楽しめます。また, 少し足を伸ばせば宮島や呉などの観光スポットもあります。何より 11 月の広島は 1 年のうちで晴天の日が多く, 最も天候の良い時期であり, 海の幸や山の幸が旬を迎え, 東広島や呉の新酒が届くこの季節に, 広島の地でお会いできることを楽しみにしています。

第64回 日本臨床細胞学会
秋期大会
The 64th Annual Autumn Meeting of
the Japanese Society of Clinical Cytology
シン・細胞診
—変化と進化を求められる今,
私たちは何をすべきであろうか?—
会期 2025年
11月29日(土)・30日(日)
会場 広島国際会議場
広島市文化交流会館
会長 有廣 光司
(広島大学病院病理診断科 教授)
主催事務局 広島大学病院 病理診断科
〒734-8551 広島県広島市南区豊1-2-3
TEL:086-250-7681 FAX:086-250-7682
E-mail: jsc64atm@kwcj.jp
https://www.kwcj.jp/jsc64atm/
運営事務局 株式会社キョー・プラス
〒700-0976 岡山県岡山市北区辰巳20-110
TEL:086-250-7681 FAX:086-250-7682
E-mail: jsc64atm@kwcj.jp

学会賞を受賞して

丸子中央病院 病院長
北里大学名誉教授

佐藤 之俊



長い伝統のある日本臨床細胞学会の学会賞を受賞させていただきましたことは身に余る光栄であり、推薦いただきました岡本愛光理事長をはじめご支援を賜った細胞診専門医会会員各位、ならびに日本臨床細胞学会会員各位に心から感謝申し上げます。

私は、癌研究所病理部でのトレーニング時代に坂本穆彦先生の勧めもあり、細胞診に興味を持つようになりました。1986年に日本臨床細胞学会に入会し、坂本先生をはじめ、癌研細胞診断部の皆様に温かくご指導を頂きました。そして、野田起一郎先生が会長の第28回日本臨床細胞学会総会が大阪で開催され、その際はじめて日本臨床細胞学会学術集会に参加しましたが、まずは共同演者としての参加でした。自分自身は1993年仙台で開催された第34回日本臨床細胞学会総会（矢嶋 聡会長）で初めて発表（症例報告）を行いました。それに先立ち1988年に日臨細胞誌に肺腫瘍の症例報告が掲載されました。このように、日本臨床細胞学会のおかげで学術活動を円滑にスタートすることができました。さらに、三井記念病院での外科レジデントの際、同院病理部の細胞検査士の方々に大変お世話になり、その甲斐あって1991年に細胞診専門医（当時は指導医）となることができました。その後は、癌研呼吸器外科、結核予防会複十字病院呼吸器外科、そして北里大学医学部呼吸器外科において細胞診に関する診療、研究を継続してきました。

ご存じのように、細胞診の大きな醍醐味は、ひとつの細胞から組織全体を推理していくことです。それに加え、病態を判断するとともに、疾患のetiologyを解明していくことが可能だという特徴もあります。私は、当初から細胞診には病理組織学よりも優れた、さまざまな点があるように感じてきましたが、特に外科の臨床医となって、簡便、低侵襲、迅速という特徴は患者さんにとって大きなメリットであることを痛感しました。

細胞診専門医や細胞検査士が学術集会や研究会の場で議論する面白さは格別です。春と秋の学術集会のみならず、所属している関東連合会や地方連携組織の集会、そして有志で継続している多摩細胞診研究会などで議論が盛り上がった後は、多くの仲間と和気あいあいとした場を楽しむという経験を積むことができました。

さて、近年の分子生物学進歩に伴い、私の専門としている肺癌診療は目覚ましい変化を遂げています。肺癌の生物学的特性に関連した遺伝子・蛋白の役割や癌の増殖・浸潤・転移の機序が明らかとなりつつありますし、こうした変化や機序を標的に薬物療法が急速に開発されています。こうした中、私は細胞診の研究として、肺癌のうち特徴的な細胞型・組織型の細胞を用いた浸潤・転移の研究、遺伝子解析を目的としたDNA保持方法の開発、呼吸器における液状化細胞診材料を用いた検討などを進めてきました。

このように呼吸器分野を中心に活動してきた細胞診ですが、縁あって国際的な事業に関与する貴重な経験をすることができました。それは、WHO/IARC/IACの国際的な呼吸器細胞診判定基準策定のプロジェクトに参加する機会を頂いたことです。この事業では、日本から複数の参加もあり、専門医、検査士の皆様と推進してきた研究の成果を国際的な場で反映することができたと自負しております（図1）。さらに、肺癌取り扱い規約の細胞診の項目の責任者として活動する場もいただきましたし、委員の皆様と協力して詳細な解説を加えた書籍を上梓することもできました（図2）。そして、こうした研究と成果について第61回春期大会の会長講演「細胞診のノブレス・オブリージュ～私たちの目指すもの～」で講演できたことは、WEB開催ではありましたが、私個人のみならず一緒に仕事をしてきた仲間の皆さんにとっても感慨深いものだったと思います。

学会活動においては、2007年から編集委員長を拝命し、その任期中に日本臨床細胞学会雑誌の電子化と電子アーカイブ化を行いました。また、2007年から理事を務め各種委員会活動や教育に携わってきました。さらには、2019年から2期4年間にわたり理事長を拝命し、日本臨床細胞学会の運営に取り組むとともに、2018年から2023年まで日韓細胞診合同会議の日本側事務局を担当しました。また、地域での活動として2008年より神奈川県の皆様とともに細胞診専門医や細胞検査士の育成に関わることができました。このように、会員の皆様と協力して学会や専門医会の活動を支えることができました。現在は、IAC理事、IAC連絡委員会委員長として、微力ながら国際的な活動に幾ばくかの貢献をしたいと思っております。

細胞診は横断的に多分野の医師、検査士が垣根なく交流できる場であり、学術面のみならず、いろいろな経験をさせていただきました。このように学会・研究活動を通じてさまざまな分野の多くの仲間に出会えたことは私にとって望外の喜

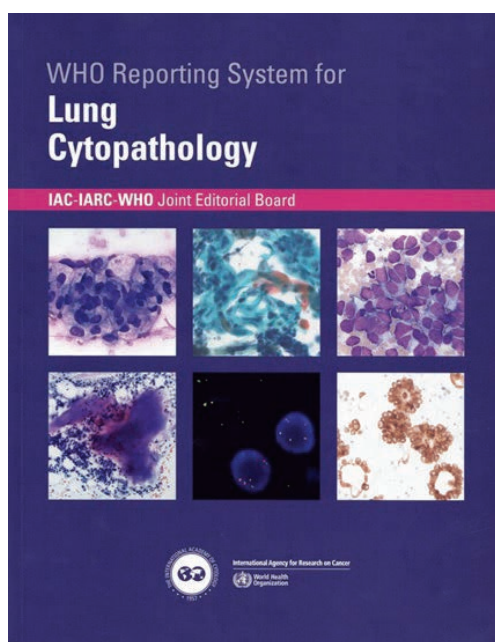


図 1 WHO Reporting System for Lung Cytopathology (2022 年)

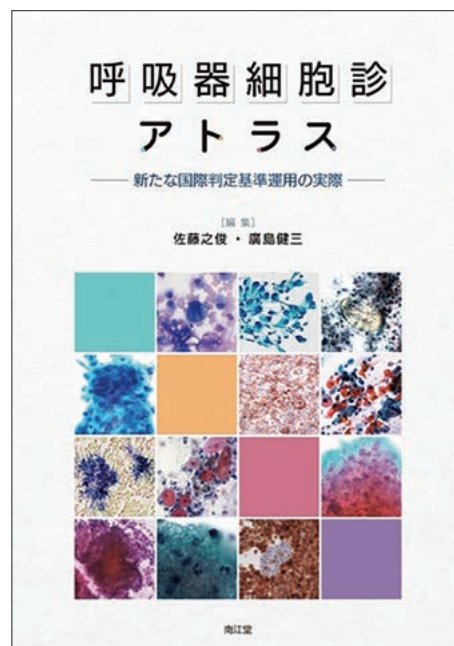


図 2 呼吸器細胞診アトラス

びです。本学会は、細胞診専門医や細胞検査士制度を確立し、細胞診の精度管理と普及によって広く社会への貢献を成し遂げています。その一方で、学術面からみると、細胞診断に関する形態学的研究に加え、分子生物学的にも多くの業績が蓄積されていますので、今後の益々の発展が期待されます。

最後に、本学会入会後 35 年以上の長きにわたり、素晴らしい先輩、同僚そして後輩に恵まれたことを感謝します。これからも日本臨床細胞学会と細胞診専門医会のさらなる発展を祈念申し上げます。



沿 革

昭和 58 年 (1983) に日本臨床細胞学会の県支部に関する施行細則が制定され、当学会はその翌年の昭和 59 年 (1984) に設立された。当初の学会名称は「日本臨床細胞学会石川県支部」であったが、平成 27 年 (2015) より「石川県臨床細胞学会」に変更された。歴代の会長は、昭和 59 年 (1984) ～平成 12 年 (2000) まで故谷本一夫先生 (金沢大学医療技術短期大学部衛生技術学科)、平成 12 年 (2000) ～平成 22 年 (2010) まで故井上正樹先生 (金沢大学産科婦人科)、平成 22 年 (2010) ～平成 25 年 (2013) まで車谷 宏先生 (石川県立中央病院病理診断科)、平成 25 年 (2013) ～平成 28 年 (2016) まで河原 栄先生 (金沢大学保健学類検査技術科学)、平成 28 年 (2016) ～令和 3 年 (2021) まで笹川寿之先生 (金沢医科大学産科婦人科)、令和 3 年 (2021) ～現在まで湊 宏 (石川県立中央病院病理診断科) が務めている。事務局は、金沢大学第 3 内科、金沢大学医療技術短期大学部、金沢医療センター、石川県立中央病院、金沢大学保健学類検査技術科学と移動し、現在は石川県立中央病院となっている。

第 1 回学術集会は、国立金沢病院 (現金沢医療センター) 産婦人科の丹後正紘先生が世話人となり、石川県医師会館にて昭和 60 年 (1985) 3 月に開催された。以後専門医が所属する県内の各施設にお世話になりながら開催されており、令和 4 年 (2022) は Web 開催となったが、毎年途切れることなく開催されている。令和 7 年 (2025) 2 月で第 41 回を迎えている。

その他、10 年以上にわたり石川県細胞診従事者育成研修会と題して、県から補助金をいただき年に数回研修会を開催している。平成 26 年 (2014) には、この活動が認められ、北國がん基金から啓発活動助成部門で表彰を受けている。令和 2 年 (2020) ～令和 4 年 (2022) の間是对面での講習の代わりに、畿央大学臨床細胞学研究センターのオンデマンド配信を利用して実施した。

現 況

令和 6 年 (2024) 2 月の時点で、会員数は 153 名で、医師 53 名 (専門医 43 名、歯科専門医 1 名)、検査技師 100 名 (細

胞検査士 98 名) となっている。令和 6 年 (2024) 5 月の時点で、全国の専門医数は 3188 名、細胞検査士数は 8185 名となっており、石川県の人口が、日本全国の約 1% であることを考慮すると、(全国の数が適正かどうかは別として) 割合としては特に少ないとはいえない。役員は、会長 1 名、副会長 1 名、幹事 若干名、会計 1 名、監査 1 名からなり、専門医 10 名程度、細胞検査士 5 名程度で構成されている。役員の任期は 3 年とし、平成 24 年 (2012) より会員の投票により選出されている。会長は幹事の互選により決定している。会費は 5 年前に一度値上げしたが、ほぼ据え置きとなっている。会員が大都市圏に比べ多くないこともあり学会運営が厳しくなっている。3 年前から会員にメールアドレスの登録をお願いし、幸いにもほとんどの方にご協力をいただいている。このことにより各種連絡にかかる郵送料が節約できている。

学術集会及び総会は、年 1 回開催している。毎年一般演題が 6 ～ 8 題、教育講演あるいは特別講演が 1 ～ 2 題、スライドセミナーという構成となっている。スライドセミナーは過去最高 6 題の時もあったが、最近はほぼ 3 題で落ち着いている。またスライドセミナーの回答者に関しては、細胞検査士 2 名と医師 1 名の 3 名のこともあったが、最近はほぼ細胞検査士 1 名となっている。毎回出席者も多く、毎年全国より著名な先生方をお迎えし、会員にとって大変有意義な会となっている。また、北陸 3 県で構成される臨床細胞学会北陸連合会では、毎年学会賞として、功労賞、医師特別功労賞、谷本賞 (論文部門)、谷本賞 (発表部門) を設けており、石川県から該当者が選出された場合には、石川県臨床細胞学会の学術集会で毎年表彰を行っている。なお、谷本賞に関しては、故谷本一夫先生からいただいた寄付金より毎年賞金が付与されている。その他の活動として、石川県細胞検査士会や検診センターと協力し、毎年子宮の日 (Love49) の活動が県内で行われている。コロナ禍の時期には、県内の各施設へのニュースレター等の配布や設置等のみのこともあったが、それ以外は金沢駅前等で、パンフレットやグッズの配布を行い、積極的に啓蒙活動を行っている。

3 年前よりホームページを刷新し、事務局の尽力により頻回に更新を行っている。スライドセミナーの症例や会員の論文等も掲載され、充実したものとなってきている。

課題と展望

専門医機構による専門医制度が始まって以来、専門医の受験者 (特に病理診断科以外の科の先生方) が減少しているこ



写真 子宮の日（Love49）の活動の様子

とが危惧される。また、子宮頸部病変の診断に関しては、HPV 検査の役割が大きくなってきており、今後の動向に注目していきたい。石川県細胞診従事者育成研修会に関しては、年数を経るごとに県からの予算が減少してきており、特に2024 年は地震の影響もあって大幅に予算を削減され、1 回のみの開催となった。今後は自前で、より低額で勉強会を開けるようなシステムづくりも必要と感じている。当地区からは論文発表が従来少ない傾向にあったが、谷本賞の授与やホームページへの掲載等で活性化されてきた感がある。今後益々会員のモチベーションを高めるような工夫を行っていきたいと考えている。

今後は病変の診断において遺伝子検査がますます導入され、疾患概念・分類の変遷がさらに加速するであろうと思われる。日々の診断や検体の活用に関して、これらの変化に柔軟に対応できる細胞検査士と専門医の育成が求められる。AI 診断も徐々に導入されていくだろうが、その結果を判断し、どのように適切に使用していくかの能力が問われることになる。これらの点を踏まえながら、会員一人一人のレベルアップをサポートするための学会運営とその発展に精励していくことの重要性を認識している。

全国会員の先生方におかれましても、今後とも当学会へのご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

第87回細胞検査士ワークショップを終えて

第87回細胞検査士ワークショップ実施委員長
(JA 尾道総合病院病理研究検査科)

佐々木健司



このたび、第87回細胞検査士ワークショップを開催いたしました。講義はWEB配信(2024年3月25日から4月8日)で、鏡検実習は2024年3月30日(土)に広島大学医学部の形態実習室にて行いました。講義のみの受講者は657名、鏡検実習の希望者は定員(60名)を超えてキャンセル待ちが出ました。講義、実習とも予想を超える受講者数でしたが、多くの方々のご協力により、滞りなく終えることができました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

開催までの流れですが、2023年10月に阿部 仁細胞検査士会会長からの実施委員長要請の電話より始まりました。全国の細胞検査士会役員歴3年の私に務まるのか大いに迷いましたが、私個人および広島県にとって名誉なことですし、分らないことがあれば阿部会長がアドバイスしてくださり、しかもご来広いただけるとのことでしたので、お引き受けしました。阿部会長からはプログラムの内容については全て一

任するが、赤字は避けて欲しいと注文されました。そこで私が決めたことは、

1. 発生頻度は高くないものの、遭遇すると診断に苦慮する領域(外陰・膣の腫瘍、唾液腺腫瘍、骨・軟部腫瘍など)を入れること、
2. WEB配信の講師はその領域において第一線でご活躍されている先生にお願いすること、
3. 鏡検実習の講師は中国四国地区の細胞検査士を中心に名前があまり知られていなくても地道かつ真面目に活動されている方を選任すること、
4. 自分も実習講師を務めること、
5. 実習については標本の横に置いてある解説書をまとめてハンドアウトを作成すること、
6. 鏡検実習は土曜日開催とし、終了後に会員意見交換会(懇親会)を行うこと、

でした。それから、7名のWEB配信講師の先生と6名の実習講師の先生にお願いしたところ、どの先生も快くお引き受けくださいました。ただ、婦人科は外陰、膣、膣断端の病理細胞診で比較的可なりな領域でしたので、講師の先生方には、ご負担をおかけしたことを心苦しく思っております。また、



ハンドアウト

第87回細胞検査士ワークショッププログラム	
【実施委員長】 佐々木 健司 (JA 尾道総合病院 病理研究検査科)	【鏡検実習】 期日：2024年3月30日(土) 会場：広島大学医学部 形態実習室 受講人数：60名
【WEB講演講師】	【担当講師】
婦人科 柳井 広之 先生 (岡山大学病院 病理診断科) 「外陰・膣の腫瘍」	婦人科 藤原 誠 先生 (富山市立病院 検査技術科) 呼吸器 多田 有輝子 先生 (香川大学医学部附属病院 医療技術部/病理診断科・病理部)
呼吸器 羽場 凡次 先生 (香川大学医学部附属病院 病理診断科・病理部) 「実習10症例の細胞像から学ぶ呼吸器細胞診の世界」	呼吸器 中村 寿治 先生 (榑多岐みん病院 臨床検査科) 腫瘍 佐々木 健司 先生 (JA 尾道総合病院 病理研究検査科)
唾液腺 樋口 佳代子 先生 (兵庫県立病院病理診断科) 「唾液腺細胞診—ミラノシステムのすすめ—」	泌尿器 神田 高樹 先生 (JA 尾道総合病院 病理研究検査科)
腫瘍 熊登屋 憲司 先生 (倉敷中央病院病理診断科) 「生検時代の腫瘍・組織診断」	体腔腔 岩原 利幸 先生 (中国中央病院 臨床検査科)
泌尿器 中山 宏文 先生 (JR広島病院 臨床検査科(病理診断科)) 「自然尿の細胞診」	骨軟部 池部 浩一 先生 (がん研究会有明病院 臨床病理センター 細胞診断部)
中皮腫 亀井 敏明 先生 (PCL福岡病院・細胞診センター) 「中皮腫細胞診の特徴と細胞鑑別のポイント」	【会場責任者】 大土 由加利 (広島大学病院 病理診断科)
骨軟部 山下 孝子 先生 (がん研究会有明病院 臨床病理センター 病理部) 「骨軟部腫瘍の細胞診—悪性性腫瘍を中心に—」	
※「講義のみ」は受講人数の制限はありません。	

鏡検実習プログラム	
10:00~	受付
10:30~10:30	オラメンテーション
10:30~11:10	鏡検10枚(1症例4分)
11:10~11:30	質疑・休憩
11:30~12:10	鏡検10枚(1症例4分)
12:10~13:00	質疑・昼食・休憩
13:00~13:40	鏡検10枚(1症例4分)
13:40~14:00	質疑・休憩
14:00~14:40	鏡検10枚(1症例4分)
14:40~15:00	質疑・休憩
15:00~15:40	鏡検10枚(1症例4分)
15:40~16:00	質疑・休憩
16:00~16:40	鏡検10枚(1症例4分)
16:40~17:00	質疑・休憩
17:00~17:40	鏡検10枚(1症例4分)
17:40~18:00	質疑・休憩
18:00~	終講
18:30~	会員意見交換会
※ 本大会院内、大学周辺にコンビニエンスストアはありますが、休憩時間が短いため、軽食はご持参されることをお願いいたします。	

ワークショッププログラム



鏡検実習の様子



阿部細胞検査士会会長，講師，実務委員の集合写真

講師の依頼と並行して広島県細胞検査士会役員を中心とする実務委員を15名選出しました。会計や物品購入、鏡検実習会場の設営はすべて実務委員にお願いし、私は講師の先生方への対応と自分の講義の準備に専念させてもらいました。

その後、WEB配信の講師の先生方より講義データをいただきました。データの提出締め切りまで3ヵ月程度でしたが、どの先生も期限内に提出してくださいましたので、WEB配信期間が変更にならなくて、大変ありがたかったです。WEB配信の講義は鏡検実習の5日前より15日間行われました。一部では雑音が入って聴き取りづらいとの声もありましたが、大きなトラブルもなく、無事終了しました。各先生とも基礎から応用まで分かりやすく説明をされており、鏡検実習の内容がより理解しやすかったと考えます。

鏡検実習は3月30日に開催しました。年度内ギリギリでしたが、十分な準備期間が欲しかったこと、雪の心配がないこと、新型コロナやインフルエンザの流行がある程度収まっていると思われたことより、この日としました。当日は快晴

で受講者の当日キャンセルもなく、全員揃って開始することができました（体調不良で途中退出された人がいましたが）。長時間ではありましたが、受講者は気持ちを切らすことなく集中して鏡検していました。質問も活発にありましたので、私自身も講師をして良かったと思っております。そして、顕微鏡のトラブルや標本の破損もなく、無事終えることができました。鏡検実習終了後は会員意見交換会（懇親会）を行いました。関西や九州の受講者の参加もあり、大いに盛り上がりました。最後は日付が変わるまで親睦を深めました。収支ですが、受講者が多かったため、顕微鏡のメンテナンスとハンドアウトを作成しても赤字になることはありませんでした。

最後に改めまして、本ワークショップ開催にあたり、ご多忙の中、講師を快くお引き受けくださいました先生方、そして多大なご協力をいただきました実務委員の皆様へ深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

2024 年度細胞診専門医資格認定試験を終えて

2024 年度細胞診専門医資格認定試験実施委員長 近内 勝幸

2025 年 2 月 1 日（土）に、AP 浜松町で細胞診専門医資格認定試験を行いました。今年度は、総合科 137 名、歯科 8 名の計 145 名が受験しました。

2 月という寒い時期ではありますが、天候にも恵まれ滞りなく実施できました。

受験生の皆様からいただいた、試験中の水分摂取の要望に応え、可能にいたしました。また、本会場は利便性に優れており評価をいただいているのですが、トイレの数が少ないため、休憩の時間を昨年より長くとることいたしました。学習の成果を存分に発揮していただけたかと思います。

試験を実施するために、委員は長い時間をかけて疾患の決定、標本の選定、問題の作成を行っております。委員の仕事

はボランティアであり、かつ目立たないように活動しています。専門医の輩出は学会の発展に不可欠な重要事項の一つです。まさに縁の下の力持ちといえます。委員の皆様には感謝申し上げます。

細胞検査士の皆様にも重ねて感謝申し上げます。試験実施には委員だけでは難しいため前日の金曜日から会場設営、PC チェック、試験当日には受付、受験生誘導、監督補助業務を担っていただいております。委員会を代表してお礼申し上げます。

最後に 4 年間の委員長としての任期を全うできましたこと、私にとって貴重な経験となりました。ありがとうございました。

第57回細胞検査士資格認定試験を終えて

第57回細胞検査士資格認定試験委員長
(熊本大学病院病理診断科)

三上 芳喜



第57回(2024年度)細胞検査士資格認定試験は、1次が2024年10月26日(土)に大阪府大阪市(CIVI研修センター新大阪東, KITENA新大阪)、2次が12月7日(土)、8日(日)の2日間にわたり、東京都三鷹市(杏林大学三鷹キャンパス講義棟)で実施されました。1次試験

の総受験者は欠席者5名を除く677名で、うち357名が合格し、合格率は52.7%でした。2次試験は1次試験免除者139名を加えた496名のうち、1名が欠席し、合計495名が受験しました。採点結果をもとに12月20日(木)にWEBによる合否判定会議が開催され、344名を合格者とする事が決定されました。2次試験の合格率は69.5%でした。合否結果(合格者受験番号)は12月23日(月)に学会HP上で発表され、2025年1月16日(木)に正式な合否通知が受験者に発送されました。

試験の実施にあたっては、2024年3月10日(日)に第1回の運営委員会がWEB上で開催された後、試験当日の実施を担当する実施委員、問題作成委員が選考・依頼されました。1次試験(筆記・細胞像)の問題は7月7日(日)の第1回、8月4日(日)の第2回、9月1日(日)の第3回問題作成委員会を経て最終稿が確定し、1次試験実施の準備が進められました。1次試験終了後、2次試験で使用する試験問題、プレパラートが問題作成委員より提出されました。

このように試験は大過なく無事終了しました。細胞検査士委員会、第57回細胞検査士資格認定試験委員長として、問題作成、試験の実施にご協力をいただいた各関係委員の方々、事務作業をサポートいただいた学会事務局スタッフの方々、適宜ご助言などいただいた本学会理事、2次試験の会場の使用をご許可いただいた杏林大学に、あらためて厚く御礼を申し上げます。本試験は、高いスキルと有する細胞検査士を世に送り出すことによって本邦の医療を支え、かつ細胞診断学の振興に寄与するという意味において、日本臨床細胞学会の事業の中でも極めて重要なミッションであると位置づけられています。従って、これまで1次および2次試験の問題は細胞検査士あるいは細胞診断専門医である問題作成委員によって精選され、多くの実施委員の協力により厳正に実施されてまいりました。

一方で、働き方改革、技術革新に伴う医療・医学の高度化、国際化(グローバル化)を受け、試験のあり方が今、大きく問われています。そのような状況の中、今後の細胞検査士資格認定のあり方を議論するためのWG(ワーキンググループ)の設置が2024年3月9日(土)に開催された令和5年度第4回理事会で附議され、承認されました。2024年8月19日(月)に第1回、2025年1月7日(火)に第2回が開催され、試験の形式、合否判定基準、試験日程の設定の仕方、試験会場選定の手続き、解答用紙のデザイン、採点業務の外注化、合格発表の形式、試験運営委員会の構成、受験料、事務局の負担軽減、細胞検査士養成課程、養成所の認定、さらに国際細胞検査士資格認定試験(IAC試験)、などについても議論を進め、2026年前半を目処に提言を取りまとめる予定です。

特に優先度が高い課題・問題は、試験の形式と採点基準、会場の選定です。試験の形式については、問題作成委員の負担軽減、採点と合否判定の正確性の担保と迅速化、という観点から、CBT(computer-based testing)の導入を視野に入れており、顕微鏡試験に変わるものとして、すでに専門医試験で導入されているWSI(whole slide imaging)の採用を検討すべき時が来ていると考えています。現時点では、スクリーニング試験でのWSIの導入については時期尚早であるとする細胞検査士が多いため、引き続き検討課題とする一方で、同定試験はWSIを用いて1次試験で実施し、顕微鏡を使用する2次試験をスクリーニング試験に特化させること、技術的な問題がクリアされた段階でWSIによる2次試験を実施することも想定しています。試験のCBT化は全国各地の複数の都市での試験の実施を可能とし、受験者の交通費・宿泊費を含む負担の軽減にも寄与すると考えられます。

2次試験会場については、欠席者は1名のみで、大きなトラブルもなく、好天にも恵まれ無事に試験が実施されました。しかし、今回の試験の合否発表後に受験者を対象として実施したアンケートでは、負担が大きいため、利便性の高い会場での実施を望むとする意見が多く寄せられました。今回の会場となった杏林大学三鷹キャンパス講義棟ではスペースや附属施設などを含めて良好な試験環境を確保することができましたが、羽田空港や東京駅からのアクセス、宿泊施設の確保といった点で課題が残りました。これを受け、2025年度第58回は東京都内のより利便性の高い会場で実施する予定としています。

2019年までは例年、東京富士大学が2次試験会場となっていましたが、COVID-19の流行後は虎ノ門ヒルズ(2020年、

2021 年)、ウインク愛知 (2022 年)、名古屋プライムセントラルタワー (2023 年) で実施するなど、会場は一定していませんでした。大学施設は会場使用料が抑えられる一方で、学内行事の都合が優先されるため仮予約や複数年にわたる継続使用が難しいといった問題があります。これに対して、民間の貸会議室は経費が高額であるものの、利便性の高いエリアでの開催が可能で、受験者の負担軽減にもつながります。

また、仮予約が可能です。いずれにしても、可能な限り受験者への便宜を第一に考えて選定するための仕組み作りが必要であると考えています。

以上、第 57 回細胞検査士資格認定試験の報告とともに、試験をめぐる課題について述べました。細胞診専門医の皆様には、次世代を担う細胞検査士の認定と育成のために、ご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

私と細胞診

—血液細胞より始まったさまざまな出会い—

大阪市立総合医療センター病理部・病理診断科 井上 健



ある日の昼下がり、一通のメールが舞い込んできました。日本臨床細胞学会からです。私は、理事を拝命している関係で普段から数多くのメールを頂戴しており、今回もその類かと思いきや、細胞診専門医会会報の執筆依頼でした。還暦を過ぎ、もはや時代の流れからも取り残されつ

つある身であり、果たしてご期待に応えられるか怪しいところですが、恐る恐る依頼内容をみました。そこには、「細胞診専門医の輪—先輩・同輩・後輩—」とあり、思いの丈をお書きになってくださいとのことです。何が書けるか、思いあぐねてとりあえず、過去の会報を眺めてみました。ほとんどの先生方は、御経歴の中で、出会われた先生方、指導をお受けになった先生方に言及されています。病理医であれば、卒後〇〇年に病理学教室に入局し、細胞診の標本も見ることになった。そこでは〇〇先生に指導を受けながら……といった具合です。はじめにお断りしておきますが、私はカテゴリーとしては病理医を自称しており、いまでこそ母校の病理学教室非常勤講師として講義も担当していますが、これまで正式に病理学教室に所属したことは一度もありません。いわば病理医の中では異端児です。また、社会人になって勤務した病院は研修医の2年間を除けば現在の大阪市立総合医療センターを含めて2カ所のみであり、履歴書の職歴は余白だらけのきわめてシンプルなものとなってしまいます。そんな私に、皆様に役に立つような内容が書けるか？と自問してみましたが、そのような私にでも、細胞診の専門医試験（当時は指導医試験）を受験し、細胞診業務に携わり、学会や学術集会にも幾分関わってきました。「思いの丈をお書きになってください」との依頼ですので、これまでの経験をふまえながらマイヒストリーと細胞診を介しての出会いについて述懐してみることにしました。

私は、大阪市立大学（現 大阪公立大学）医学部の出身ですが、当時の大阪市立大学では、M4の約半年間に基礎の教室に配属され、修業実習と称する実習が行われていました。それまでに、アーサー・ヘイリー著の「最後の診断」を読んだことで病理学に興味を抱いていたことから、病理学での修業実習を希望し、第一病理学教室に配属されました。卒業が近づくにつれ、どの医局に入局するか、という選択を迫られま

したが、私は診断としての病理学に興味をもっていました。ところが、当時の大学の病理学教室は実験病理が主体であり、診断とは無縁の世界でした。そこで修業実習でお世話になった第一病理学の助手の先生に御相談したところ、大阪市立小児保健センター病理の小林庸次先生を紹介していただき、小林先生に話を聞きに行きましたが、診断病理を志すなら、臨床を知らないといけないとのことで、いったん臨床の医局に入局することを勧められました。そこで私は、病理診断に関係のある、すなわち悪性腫瘍を扱う診療科という点と、自ら顕微鏡をのぞいて診断する機会のある診療科として血液内科医を志しました。1987年のことですが、当時の大阪市立大学では血液内科は独立しておらず、臨床検査医学教室が血液内科部門を有していたため、臨床検査医学教室に入局し、血液内科の臨床をすることになりました。また、病院の検査部門を統括する教室でもあったため、病院の病理部門とも密なつながりがありました。ということで、私と細胞（診）との出会いは、血液細胞がスタートです。後に同教室の教授となる血液検査学がご専門の異典之先生が骨髓塗抹標本の診断・所見を記載されていましたが、その報告書をみながら、来る日も来る日も骨髓塗抹標本を眺めていました。

ちょうどこの頃、第二病理学教室に大阪大学より櫻井幹己先生が教授として赴任され、病院病理部門が中央検査部より独立し、同じく大阪大学から若狭研一先生が助教授として着任されました。これまでの歴史的な経緯から、臨床検査医学教室のスタッフは病理部に比較的足を向けやすい環境にありましたので、早速私を若狭先生に紹介していただき、病理診断の手ほどきを受けました。当時私は、臨床検査医学教室の大学院生でしたが研究らしい研究はせず、相変わらず血液内科の臨床と骨髓塗抹標本を眺めては、白血病の病型分類やMDSの診断に明け暮れる毎日でした。ある日、異先生より電頭をするように言われ、血液細胞の電頭を少しでもかじることになりました。1990年には網状赤血球の微細構造について Acta Cytologica の Letter to the Editor に投稿し、細胞診の学術雑誌としては完全に場違いの内容でしたが、査読者からの温情のもと採用していただきました。これが細胞診の学術活動の第一歩でありますから、これまた常軌を逸しています。この頃、大阪市立病院群の統廃合の構想があり、私が大学院卒業の半年後に大阪市立の5病院（うち一つが前述の大阪市立小児保健センター）が統合され、1,063床の大阪市立総合医療センターが開設されることとなりました。私は、前述の小林先生の御推薦をいただき、1993年4月に大阪市

立小児保健センターに配属され、病理医としてのスタートを切りました。同年12月に大阪市立総合医療センターがオープンするにあたって、1,000床を超える総合病院で、細胞診専門医は婦人科部長予定の山本久美夫先生お一人という状況であり、私は半年の間に細胞診専門医を取得することが至上命題で、細胞診の猛勉強をする羽目になりました。問題形式のアトラスを繰り返し、実際の細胞診標本を見る機会がほとんど無い状況（配属されたのが小児保健センターという名のこども病院であったためです）でしたが、理解できないところは、大阪市立大学病理部の若狭研一先生や細胞検査士の御指導を仰ぎ、同年の細胞診指導医試験に無事合格しました。病理専門医よりも先に、細胞診専門医を取得した点でも変わり者です。

1993年12月に大阪市立総合医療センターがオープンし、私もその病院に異動となり細胞診標本をみることになりましたが、これまでの机上のアトラスで見ていた知識のみでは全く歯が立たないことに愕然としながらも、職場の細胞検査士に教わりながら細胞診業務に携わり、日本臨床細胞学会に出題することを心がけました。数年後、呼吸器外科部長の多田弘人先生より、肺の大細胞神経内分泌癌（LCNEC）についての厚生労働省班研究（浅村班）が立ち上がったので協力してほしいとの話があり、私も協力者として関わることになりましたが、当時LCNECは1999年WHO分類第3版に記載されたばかりでした。私自身肺癌病理の専門家ではなかったのですが、肺癌病理のエキスパートの先生方に混じって片っ端から標本を見まわりました。同時に細胞診所見についても検討していく中で、当時、癌研究会癌研究所に勤務されていた佐藤之俊先生に御指導いただきました。それらの活動を背景に、南雲サチ子先生の御推薦により、2001年の日本臨床細胞学会近畿連合会のスライドカンファレンスの回答者、翌

2002年の日本臨床細胞学会総会では、スライドカンファレンスの出題者に推薦していただき、呼吸器から2題出題いたしました。また、布引 治先生の御推薦で、大阪府立成人病センター細胞検査士養成所の非常勤講師として呼吸器細胞診を担当することになり、今では、関西医療大学、畿央大学、神戸常盤大学、森ノ宮医療大学で細胞検査士育成の一端を担わせてもらっています。肺のLCNECの細胞診については、その後も症例を蓄積し、2007年の日本臨床細胞学会大阪府支部学術集会の特別講演、さらに2010年の日本臨床細胞学会秋期大会では、覚道健一大会長の御高配で、要望講演で講演する機会が得られたのは忘れがたい経験となりました。その後、2013年の秋期大会ではコアプログラム委員として、記憶に新しい2024年の春の総会では森井英一大会長のもと、若狭朋子先生とともに副会長として、プログラム委員長の河原邦光先生を含めて、大会運営の一端を担わせていただきました（写真）。

日本病理学会での細胞診との関わりという点では、病理専門医試験を受験する際に、日本病理学会主催の細胞診講習会の受講が必須要件となっています。2016・2017年に大阪大学の森井英一先生のもと細胞診講習会が開催され、私は脳腫瘍の圧挫細胞診、髄液細胞診について担当させていただき、2020・2021年には、京都大学の羽賀博典先生のもと同講習会が開催され、脳腫瘍に加えて造血管の細胞診を担当いたしました。この時は、ちょうど新型コロナウイルス感染拡大に伴って、2021年はWeb開催となりました。オンライン会議に不慣れな時期でしたので、講演・実習の準備にあたっては、南口早智子先生に助けていただき、なんとかバーチャルスライドによる実習標本の解説にこぎつけたのを記憶しています。

また、私は1993年に大阪市立小児保健センターに勤務し



写真 2024年日本臨床細胞学会総会にて
左より森井英一大会長ご夫妻、プログラム委員長の河原邦光先生、
副会長の私と若狭朋子先生

て以来、小児がんの病理診断をテーマとして取り組んでいますが、小児がんの領域では、細胞診は十分に活用されていません。昨年、日本臨床細胞学会総会では森井英一大会長の御高配で、私が提案した希少がんの病理・細胞診のシンポジウムが採択され、その中で小児がんの細胞診について、私の先輩にあたる大阪市立十三市民病院の福島裕子先生にご発表いただきました。また、同年に文光堂より「術中迅速病理診断スタンダード」が刊行され、その中で小児腫瘍の項目を執筆させていただきましたが、各種小児腫瘍の術中迅速診断時の補助ツールとして、細胞診像についても記載しました。

細胞診に関わる学会役員や委員会活動については、2010年に大阪府医師会の細胞診管理委員会の委員として植田政嗣委員長の御指導を仰ぎながら活動することになり、現在植田先生の後任として同委員会の委員長を拝命しています。また、2013年の日本臨床細胞学会秋期大会終了時に、大会長の若狭研一先生より、そろそろ日本臨床細胞学会の理事と細胞診専門医会の総務を目指しなさい、とのお言葉を頂戴し、2015年に理事ならびに専門医会総務に選出していただきました。連携組織での活動としては、2017年から大阪府臨床細胞学会の会長、2022年から日本臨床細胞学会近畿連合会の会長

を拝命し、諸先輩方の御指導のもと、大阪・近畿地区の臨床細胞学の発展、人材育成のために努力を積み重ねています。後進の細胞診専門医として、私が大阪市立総合医療センターの病理診断科部長を拝命してからの17年間に5名の細胞診専門医が巣立っていき、各病院で細胞診業務に携わっています。

これまで述べてきたように、私は一般的な病理医とは異なる背景をもち、いわゆる細胞診の王道とは大きく外れた道からスタートしました。当初は、細胞診を系統だって学ぶ機会も無く、細胞診指導医試験を受験する際にも手探り感が強かったのですが、いま振り返ると、巽典之先生、若狭研一先生をはじめ多くの先生方との出会いがあり、皆様に支えられ、数多くの貴重な機会を与えていただいたおかげで今の私があると痛感しています。自身の経験を次の世代に伝えていき、細胞診を介しての輪が広がることを願ってやみません。

（本稿の校正作業中である2025年1月、細胞診の分野でご指導を賜り、また本原稿にもその教えに基づく内容を記した若狭研一先生がご逝去されました。若狭先生には、私が駆け出しの頃より温かくご指導いただき、その教えは今なお私の細胞診業務の礎となっております。心より哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。）

振り返れば、そこに青春

和泉市立総合医療センター病理診断科 特別顧問, 甲状腺疾患センター長
岡本甲状腺クリニック 学術顧問
和歌山県立医科大学 名誉教授
近畿大学客員教授, 中国山東大学, 山東第一医科大学 客座教授

覚道 健一

細胞診専門医会会報編集委員会委員長 森谷卓也先生より、「細胞診専門医・指導医駆け出しの頃—青春を語る」の原稿依頼を2024年8月に受けました。現在の職（和泉市立総合医療センター 特別顧問）についても、病院から「肩たたき」を受け、2024年12月末に、常勤職を退職し、非常勤職に移行することを決めた後でしたので、この原稿依頼は、とどめを刺されたような気持ちになりました。思い直して、細胞診専門医、病理専門医として歩んだ52年間に、お世話になりました日本臨床細胞学会、日本病理学会の皆様へ御礼を申し上げる機会をいただいたと解釈し、この原稿をお引き受けさせていただくことといたしました。

1973年に25歳で和歌山県立医科大学を卒業し、大阪大学医学部第1病理学教室で、病理医としての歩みを始めました。取り組んだ研究テーマは、1) 甲状腺髄様癌、2) 副甲状腺病変、3) 甲状腺腫瘍診断における病理医の診断の揺れ、4) 甲状腺境界腫瘍、5) IgG4甲状腺炎、6) 甲状腺細胞診、7) 甲状腺診療における欧米とアジアの差異、8) 乳癌の研究、9) 肝炎の研究などです。私が最初に細胞診に触れたのは、病理学教室大学院生（1973～1977年）のころ、大阪大学付属病院で、甲状腺橋本病の術中迅速組織診断を担当した時です。私が慢性炎症（非腫瘍）と返事しようとしているときに、細胞検査士草分けの病理主任技師が、気を利かせて、組織のタッチ細胞診をして、「甲状腺癌（リンパ節転移）」と診断しました。リンパ球を背景に濾胞上皮細胞があり、核異形もあることから、リンパ節からのタッチ標本と勘違いしての誤診でし

た。「病理医駆け出し」の私は、「他人を疑う」ことを知らず、「細胞検査士が癌と診断したので、術者の肉眼診断を優先して判断してほしい。」と、いわゆる「診断保留」の返答をしたことを鮮明に覚えています。当時細胞診は全く経験がなく、どのような長所と短所を持つ検査であるか分かっておらず、「細胞診を学ぶきっかけ」になったエピソードです。術者は、高井新一郎先生（平成27年逝去）で、この診断報告で、私の名前を覚えていただき、大阪大学第2外科の甲状腺グループから、目をかけていただきました。神前五郎教授が大阪で第9回甲状腺外科検討会を主催された時に、甲状腺髄様癌の全国集計に参画させていただき、私が甲状腺病理を専門とするきっかけを作っていただいたと感謝しています。この原稿を書いている2024年8月23日のPubMed文献検索で、Keyword (Kakudo K AND Thyroid) で、201文献がヒットすることを誇りとしています。残念ながら、高井先生、神前先生の写真は手元に見当たりませんでしたが、写真1は、左から、甲状腺専門病院、隈病院の2代目院長隈寛二先生（平成20年逝去）、3代目院長宮内昭先生（当時大阪大学第2外科）、大阪大学第1病理学教授宮地徹先生（平成20年逝去）、著者、多方面からご指導いただいた片山正一先生（平成28年逝去）、甲状腺病理を始めるきっかけを作っていただいた諸先輩が写っています（写真1）。大阪大学在籍中に出版した髄様癌組織亜型（乳頭型 PMID: 463561, 巨細胞型 PMID: 210736）の論文は、80回以上引用され、WHO分類にも引用されています。当時は論文別冊を著者に請求し、著



写真1 甲状腺髄様癌の研究（PMID: 609355）で学位をいただきました。症例提供でお世話になりました隈寛治先生（左）、宮内昭先生（左から二人目、当時大阪大学第2外科）への御礼のため、第1病理学教室主任教授宮地先生（中央）と、第1病理学片山正一先生（右）が、御礼の会を主催いただきました。



写真2 メーヨ医科大学病理学教授カーネー教授ご夫妻と、ご自宅に招かれて、米国の病理学教授の生活ぶりを垣間見ました。



写真3 初期のころのサイロイドクラブメンバーと症例検討会。



写真4 2005年 和歌山市で第52回日本病理学会秋期特別総会を開催しました。特別講演に、隈病院宮内院長（左から二人目）、ポルトガルのシモエス教授（中央）、米国のカーネー教授（右から二人目）を招待しました。

者から別冊を依頼者に郵送する習慣があったのですが、巨細胞型髄様癌の論文では1000部以上の別冊請求があり、大変驚きました。この論文のおかげで、米国留学時にMayoクリニックに受け入れていただき、J Aidan Carney 教授（写真2、令和6年逝去）の指導のもとにMayoクリニックの髄様癌症例を検討させていただきました。この論文では髄様癌の発症年齢、予後に病型による違いがあること（MEN2B患者の髄様癌は、若年発症で生命予後不良）を初めて示しました。遺伝性腫瘍の genotype-phenotype correlation の概念（後に高悪性度 *RET* p.M918T が MEN2B 症候群を形成する原因遺伝子変異部位であると、別の研究者により同定されました）発見の端緒となった論文と誇りとしています。この論文（PMID：2859923）も100回以上引用されています。

帰国後、1980年兵庫医科大学病院病理部（植松邦夫教授、平成23年逝去）の講師に採用いただき、診断病理学の経験を積むことができました。病理専門医（第526号）を申請（第4回認定）し、日本臨床細胞学会細胞診専門医（指導医）試験に合格しました（第495号）。このころの思い出は、若手甲状腺病理医たちと Thyroid Club を結成し、出身大学を乗り越えた学術活動をしたことです。「50歳停年」、「教授に昇格したら除名」という面白い規約で運用されましたが、多くのメンバーがその後教授に昇任し、規約を変更せざるを得ま

せんでした。Thyroid Club は現在日本甲状腺病理学会として活動を継続しています。甲状腺癌取り扱い規約の病理委員として、その編集に多くの会員が協力しています。30歳代から現在まで40年間の交流と、会員の皆様の友情に心から感謝しています（写真3）。

1985年東海大学医学部第2病理学（渡辺慶一教授、平成20年逝去）に異動し、副部長として付属病院病理診断科（長村義之教授）で診断病理学を経験しました。東海大学では、大講座病理学教室の運営を経験し、構成員のほとんどが教授に昇格するレベルの高い仲間との接点は大きな刺激となりました。私の病理学、病理医キャリアの中で、東海大学での5年間は、研究活動、学会活動の中心部分を形成することができたと、東海大学病理同門会の皆様に感謝しています。

1990年母校である和歌山県立医科大学第2病理学教室教授に採用いただき、20年間在籍し、24名に医学博士、3名に医学修士の学位を授与することができました。また第2病理に在籍した教室員の中から、2024年8月までに医学部教授8名（若狭、森、森川、劉、韓、楊、横井、松浦）、4年制大学教授6名（宇都宮、布引、奥野、中村、東家、栗林）が生まれたことを誇りとしています。多数の優れた教室員に恵まれたこと、教室員のたゆみない努力と、その向上心に感謝しています。この間に、日本病理学会秋期大会を和歌山市

で開催し、米国カーネー教授、ポルトガルのシモエス教授、隈病院宮内昭院長を特別講演に招請しました（写真4）。日本臨床細胞学会関連では、近畿連合会会長を務め、日本臨床細胞学会理事、専門医会長、第49回秋期大会（写真5）などを担当し、学会賞を受賞しました。

2012年、和歌山県立医科大学を定年退官後は、神戸常盤大学医療検査学科に3年間在籍しました。細胞検査士養成

コースを担当し、細胞検査士の養成に貢献できたと自負しています。その後、やました甲状腺病院、近畿大学奈良病院、岡本甲状腺クリニック、和泉市立総合医療センター病理診断科などで、非常勤病理医、常勤病理医として診断を担当しました。その間甲状腺疾患の病理学的解析／研究、甲状腺細胞診断だけでなく、病理学会、内分泌病理学会、がんセンターのコンサルテーション委員として、甲状腺疾患のコンサル



写真5 2010年11月第49回日本臨床細胞学会秋期大会を神戸市で開催しました。和歌山県立医科大学在任20年の最終年度でもあり、この写真のメンバーが、最終年度を支えていただいたことに感謝しています。



写真6 24名の病理医を含む、患者代表、分子遺伝学研究者、内分泌内科医、甲状腺外科医たちと、NIFTP国際ワーキンググループを結成し、NIFTPは癌ではない境界腫瘍であると結論しました。引用回数1500回以上の論文の共著者となりました。

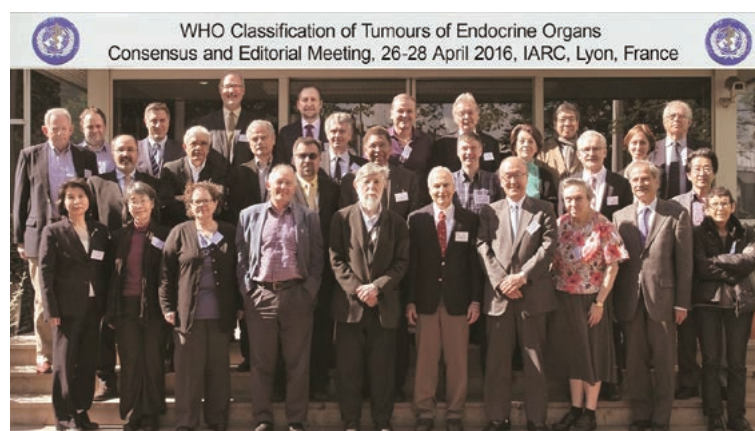


写真7 第4版WHO分類（内分泌臓器腫瘍）の編集委員会の記念写真です。写真6に写っている病理医の内、9名が含まれています。写真6の、NIFTP国際ワーキンググループは、WHO分類第4版の準備委員会だったのです。



写真 8 横浜で、2016 年開催された国際細胞学会で、スライドセミナー 4 を担当しました。左から中国の朱先生、劉先生、米国大堀先生、著者、米国マイケル先生、米国ジン先生。



写真 9 横浜で、2016 年開催された国際細胞学会で、甲状腺ベセスダのシンポジウム 3 件に参加し、欧米の多数の細胞病理医たちとの知己を得た。

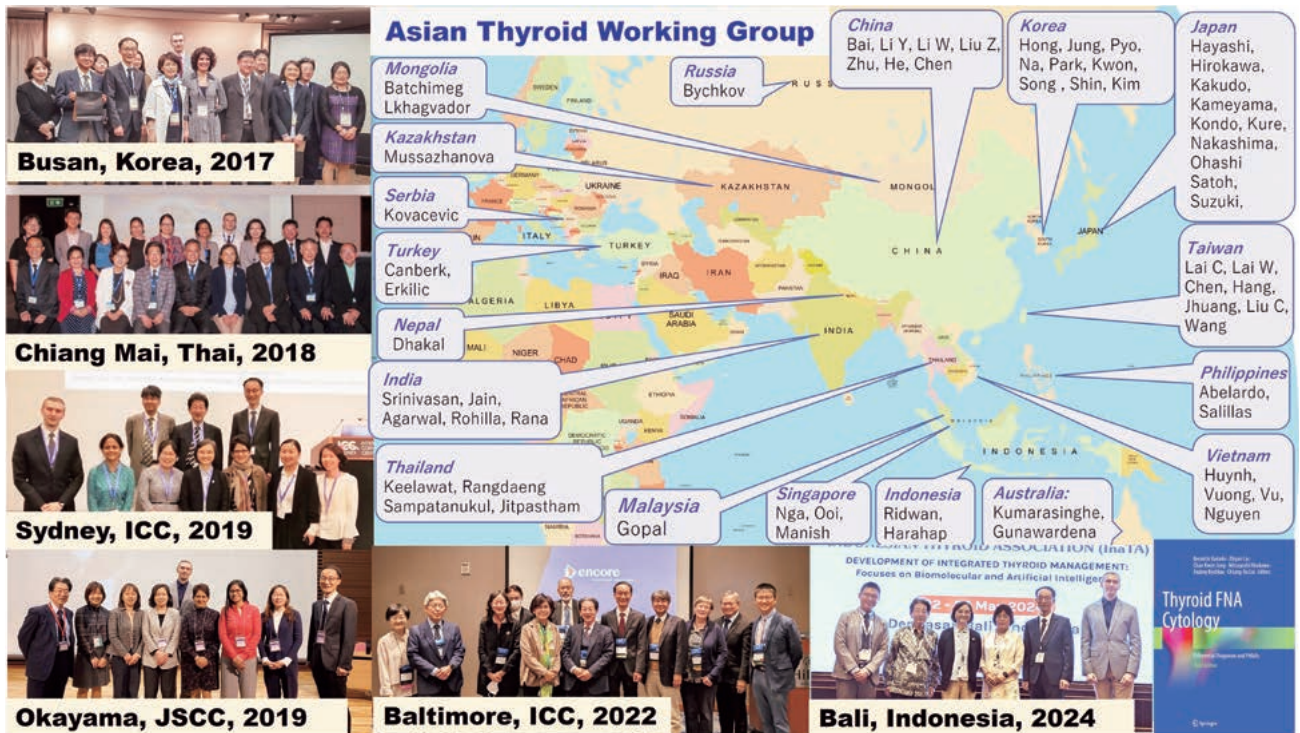


写真 10 2017 年アジアオセアニア甲状腺学会で、Asia Thyroid Working Group を発足しました。2017－2022 年の初代会長として、会員のグループ活動を多数主催しました。その結果から 100 篇以上の共同研究論文を生み出しました。また写真にあるように 6 回のコンパニオンミーティングを主催し、多くのメンバーとともに Thyroid FNA Cytology を出版しました。

テーションを担当いたしました。

国際的な病理研究活動では、境界腫瘍 NIFTP の提唱に参加し、引用回数 1500 回以上の NIFTP 提唱論文 (PMID : 27078145) の共著者となりました (写真 6)。この結果から第 4 版、第 5 版 WHO 分類の編集に、著者として参加しました (写真 7)。細胞診断学分野では、2016 年横浜で開催された第 16 回国際細胞学会で、複数のプログラムに参加し、多くの海外の友人を得ました (写真 8, 9)。この交流から甲状腺ベセスダ診断様式第 2 版、第 3 版の著者、WHO 細胞診シ

リーズ、頭頸部腫瘍の編集者となりました。

2017 年、多くのアジアの病理医、細胞病理医の賛同を得て、Asia Thyroid Working Group を結成し、2017～2022 年の初代会長に就任しました (PMID : 37981725)。このアジアの病理医を中心とする活動で、「甲状腺診療における欧米とアジアの差異」に注目した出版を続けています (PMID : 12409728, PMID : 33224851, PMID : 35159081, PMID : 37278105, PMID : 38874075)。国際的に無視されることも多い、アジアの診療の特色とその利点に焦点を当てることが



写真 11 2017 年中国山東省政府より覚道に、和歌山県立医科大学と山東医科大学の友好交流への貢献に対し、齋魯友誼賞が授与されました。同時期に元の留学生李先生（山東省立病院病理科）が、内分泌学会のシンポジウムに採用され来日されたため、あわせてお祝いの会 同門会を開催いたしました。



写真 12 2017 年 5 月大阪で開催された第 58 回総会春期に、中国人留学生劉先生（上海交通大学第 6 医院主任教授）が来日し、歓迎会を同門会主催でいたしました。



写真 13 2024 年 6 月大阪で開催された第 65 回総会春期時に、細胞診に関与している同門会のメンバーが、覚道の喜寿を祝い集まっていただきました。

できたと自負しています。これは第 2 代会長、台湾病理学会前会長、頼先生に引き継がれ、活動を続けています。多数のグループ活動から 100 篇以上の共同研究論文を発表できたことも誇りとしています。協調的なアジアの病理医たちの温かい協力に感謝しています(写真 10)。このメンバーを中心として、2024 年 Springer 社より、第 3 版 Thyroid FNA Cytology, Differential Diagnoses and Pitfalls (<https://link.springer.com/book/10.1007/978-981-99-6782-7>) を出版しました。ユニークな細胞診教科書ですので、どこかでぜひ手に取って見ていただければと思います。さらに現在 WHO 分類が細胞

診シリーズ第 1 版、頭頸部腫瘍の編集に参加しています。この細胞診専門医会会報が出版された後になると思われますが、WHO 分類頭頸部腫瘍の細胞診シリーズの出版に期待いただきたいと思います。

最後に第 2 病理同門会のメンバーの最近の写真 3 枚(写真 11～13)を提示させていただきます。同門会の皆様には、それぞれに多くの苦労はあったと思いますが、この写真に写る皆様の笑顔から、私が担当した第 2 病理の 20 年間が、記憶の中では、「楽しい思い出と、笑顔のある職場に昇華している」ことがお分かりいただけるのではないかと自負しています。末筆ではありますが、教室員の皆様方からいただきましたご援助とご協力に感謝し、同門会の皆様の方へのご健勝を祈念いたします。

第21回日韓細胞診合同会議のご報告

日本側事務局（久留米大学病院臨床検査部）

内藤 嘉紀

細胞診専門医会の皆様におかれましては、益々のご健勝のことと拝察いたします。

2024年9月28日（土）に第21回日韓細胞診合同会議が現地開催されましたので、ご報告を致します。

本合同会議は、2002年から坂本穆彦先生、谷山清己先生、佐藤之俊先生が日本側事務局として御担当されてきた、長い歴史をもつ国際交流事業です。今年度は新型コロナウイルスの影響もなく、実りある学術活動が行えたことは、非常に喜ばしいことでした。

今年の日韓細胞診合同会議は韓国釜山のロッテホテルで開催されました。例年通り、韓国細胞病理学会秋期大会の中のInternational sessionとして開催され、日本からの参加登録者は事務局を含め24名でした。今年から、韓国側からの強い要望で「スライドカンファレンス」が新しいセッションとして組み込まれました。日本側からは、慶應義塾大学医学部病理学教室 蔵本純子先生が「Uterine body」、戸田中央病理診断科クリニック病理診断科 関れいし先生が「Lung」を御講演されました。卓越した英語力で細胞所見を丁寧に説明・解説して頂けましたので、韓国側からは大変な好評を頂きま

International Session of the 36 th Annual Fall Meeting of the Korean Society for Cytopathology (The 21 st Korea-Japan Joint Meeting for Diagnostic Cytopathology)		
Saturday, September 28, 2024		
3F Crystal Ballroom Lotte Hotel Busan, Korea		
Time	Lecture	Lecturer
10:00-10:10	Opening remarks	Korea: Seung-Sook Lee (President, Korea Cancer Center Hospital) Japan: Prof. Yoshiki Naito, MD, MAC (Kurume University Hospital)
10:10-11:00	Plenary lecture	Chairs: Prof. Yoon Jung Choi (Yonsei University Yonjin Severance Hospital) Prof. Atsuhiko Sakamoto (Omori Red Cross Hospital)
	Recent topics of thyroid cytopathology	Prof. Mitsuyoshi Hirakawa, MD, FRC (Kurume Hospital)
	AI-powered innovations in GYN cytology: a new era in diagnostic precision	Prof. Yosep Chong, MD, PhD (The Catholic University of Korea, Uijeongbu St. Mary's Hospital)
11:00-12:00	Slide seminar	Chairs: Prof. Heonyoung Kim (Seoul National University) Prof. Yukioichi Sakoh (Kansai University School of Medicine)
	Uterine body	Prof. Junko Kuramoto (Kao University School of Medicine)
	Thyroid	Prof. Soo Youn Cho (Thana Seoul Clinic)
	Lung	Prof. Reishi Saito (Tohoku Central Pathology Institute)
	Pleural fluid	Prof. Eunsh Shin (Yonjin Severance Hospital)
12:00-12:10	Photograph, Coffee break	
12:10-13:00	Poster session	Chairs: Prof. Hyun-Jung Kim (Inje University Sanggye Paik Hospital) Prof. Kennichi Kikudo (Izumi City General Hospital)
13:00-13:10	Closing remark	Seung-Sook Lee (President, Korea Cancer Center Hospital)

KJ joint meeting 2024



写真 KJ joint meeting 日本側参加者

した。また、隈病院病理診断科 廣川満良先生からは、「Recent topics of thyroid cytopathology」というタイトルで甲状腺細胞診についての最新知見を御講演頂き、大変勉強になる機会となりました。ポスターセッションは11演題で、和泉市立総合医療センター病理診断科 覚道健一先生に座長の労を取って頂きました。

2025 年 第 22 回日韓細胞診合同会議は韓国 麗水（ヨス／

Yeosu）で、9月27日（土）に開催されます。ヨスは韓国の南部に位置する全羅南道（チオルナムド）にある都市で、美しい海岸線や島々が特徴の都市です。2015年にも同地で学会が開催されており、その時は13時30分ごろに釜山に集合して参加者一緒に現地に向かったとのこと。2025年もたくさんの参加者とともに、両国細胞診の友好と学術的交流を深めていきたいと思ひます。専門医の皆様のご参加ならびにご支援をお願い申し上げます。



写真 KJ joint meeting 全体参加者

第29回タイー日本細胞診ワークショップ(TJCWS)に参加して

島根大学医学部病態病理学 新野 大介

今回、2025年1月22日から24日まで、タイの海岸保養地として名高いホアヒンで開催された第29回タイー日本細胞診ワークショップ(TJCWS)に参加しましたので、この原稿を書かせていただきます。実は、私は、TJCWSには5回目の参加になります。1回目は2017年にパタヤで行われた第24回TJCWS、2回目は2018年にチェンマイで行われた第25回TJCWS、3回目は2019年にバンコクで行われた第26回TJCWS、4回目は昨年(2024年)行われた第28回TJCWS、そして今回が5回目になりました。第24回から第26回では、当時私は長崎大学に所属していたので、長崎大の若い細胞検査士をつれて参加し、私はリンパ腫について講演をし、細胞検査士の方はポスター発表をしました。気軽に参加できる国際学会ということと、福岡からタイまで直行便で安く行けるということで、毎年参加させていただきました。第24回と第26回では一緒に参加した細胞検査士が、ポスタープレゼンテーションで最優秀演題賞を受賞しました。参加した細胞検査士の方々は皆、発表までポスターの作成や英語の練習など苦労していましたが、学会で賞をもらうことができ、感動し、帰国後、細胞診に対するやる気が上がったと言っていました。

今回、熊本大学医学部保健学科の矢野先生と一緒に来たのですが、彼は実は以前長崎大学で一緒に働いたことがあり、私が長崎大の細胞検査士とタイに行っていたことを覚えていて、今回私が声をかけると、「ぜひ参加したい」と言ってもらい、一緒に参加しました。矢野先生は今回、「リンパ腫細胞内の空胞形成」に関する研究のポスター発表を行い、ポスタープレゼンテーション最優秀演題賞を受賞しました。副賞

として、5000バーツがついていたようで、矢野先生は「来て良かった!」と言っていました。

ワークショップは3日間行われ、参加者の多くはタイの若い細胞検査士です。ポスターセッションと講演があり、講演は40分間英語で話すことになります。ベテランの日本からの病理医の多くは講演で発表し、若い細胞検査士はポスターセッションで発表します。私は3日目の朝一番、9時から"lymph node cytology"をタイトルとして発表しました。3日目なので、9時の段階では会場には数名しか参加者がおらず、かなり不安になりました。10分ほど話を進めると少しずつ参加者が増え、30分経過した段階で数十名となり、会場の反応も良くなり、無事発表を終えることができました。

ワークショップの楽しみは、夜のパーティとタイの観光です。初日と2日目は日本人だけでなく、海外からの参加者と一緒にタイ料理の店に行きました。タイ料理はものによっては本当に辛いのですが、おいしいです。それからタイと言えばタイマッサージですが、ホテルの向かいに評判の良いマッサージ店があり、多くの参加者がそこに行きました。60分2500円ほどで安く、とても気持ちよかったです。毎日通っている人もいました。

来年は30回記念ということでTJCWSはチェンマイで行われるようです。次回もぜひ参加したいと思っており、できれば、島根大学の細胞検査士や病理医と一緒に参加する予定です。

細胞学会に関連した学会ということで、知り合いの病理医や細胞検査士にこんなに気軽に国際学会に参加できるという話をし、参加者を増やしていきたいと思います。



写真1 講演後の表彰の様子



写真2 ワークショップの合間の昼食の様子
(左から矢野先生、河井先生、坂本先生、高橋さん、関先生、鈴木先生、私)

第 29 回タイ日本細胞診ワークショップに参加して

慶應義塾大学医学部病理学教室 藏本 純子



この度、自身の第 29 回タイ日本細胞診ワークショップ (TJWS) の参加に際しまして、寄稿する機会をいただきました会報編集委員長の森谷卓也先生をはじめ関係各位の皆様方に厚く御礼申し上げます。

私は 2007 年に新潟大学医学部医学科を卒業し、2 年間の初期臨床研修を経て 2009 年に慶應義塾大学医学部病理学教室に入局しました。入局後は一貫して分子病理学研究、病理診断・細胞診断に従事して参りました。分子病理学研究では、多層オミックス解析にて特に肝細胞がんの分子基盤の解明を行っております。病理診断では、2018 年から 2 年間の米国への研究留学後は婦人科病理診断をサブスペシャリティーとし、婦人科病理学会、婦人科腫瘍学会に所属し、婦人科病理診断・婦人科細胞診断をサブスペシャリティーとされている先生方と定期的な交流を持ちながら活動させていただいております。

今日に至るまで、分子病理学研究の分野では国際学会に参加し発表する機会を何度かいただいておりますが、細胞診

断の分野では国内学会の参加が主体でした。第 29 回 TJWS に参加することになった経緯を申し上げますと、TJWS から 4 ヶ月前に開催されました第 21 回日韓細胞診交流会に廻ります。日韓細胞診交流会では、大森赤十字病院顧問 坂本穆彦先生にご推薦いただき、スライドセミナーセッションの日本代表として婦人科症例の発表をさせていただくという貴重な機会を得ました。その際に、TJWS の日本側運営責任者である片山博徳先生にお声掛けいただき TJWS にも参加する運びとなりました。TJWS では、婦人科内膜細胞診に関するレクチャーをさせていただきました。細胞診断の分野でご高名な先生方と一緒にレクチャーセッションに参加できたことは何ものにも代え難い経験でした (写真 1)。また、3 日間にわたりご高名な先生方のレクチャーを集中して受講するという経験也非常に貴重であり、自身の見聞を広げる良い機会となりました。

TJWS では、レクチャーセッション、ポスターセッションの他に、ブレイクタイム、ランチタイム、ウェルカムパーティー等にて参加者と交流する機会がたくさんありました。日本側の参加者と交流できたことは勿論ですが、タイ側運営責任者である Samreung Rangdaeng 先生、University of Eastern Finland よりゲストスピーカーとして参加されていた Ivana Kholova 先生等、海外の先生方と細胞診断に関する学術的な議論や日常診療における細胞診断の実情について活



写真 1 登壇後にタイ側運営責任者である Samreung Rangdaeng 先生より記念品を贈呈いただいた場面



写真 2 学会 2 日目終了後の学会主催のディナーでの様子 (家族でテーブルを囲んで、左手前は藏本博行、右手前は筆者、奥は子供達)

発に議論させていただきました。上記の如く非常に貴重な経験をさせていただいたわけですが、個人的には、北里大学名誉教授 藏本博行、日本より同行した長女（9 歳）、次男（5 歳）と一緒に家族で TJWS に参加できたことは、TJWS への参加をより一層特別なものとなりました（写真 2）。

TJWS では、タイ側、日本側共に細胞診専門医のみならず、たくさんの臨床検査士、臨床検査士を目指す学生の方々が参加されていました。TJWS は細胞診専門医、臨床検査士、学生という立場の違いを越えて学術的な国際交流ができる貴重

な場であると感じ、TJWS の立上げから約 30 年にわたり運営に携わられてきた歴代の先生方には頭が下がる思いでした。今後、このような国際交流の場が益々発展することを願うと共に、自身は貴重な国際交流の場の一つとして TJWS への定期的な参加を考えております。

最後になりましたが、TJWS にて多大なるご高配を賜りました片山博徳先生、坂本穆彦先生をはじめ多くの先生方にこの場を借りて深謝申し上げます。

近畿大学奈良病院 病理診断科 若狭 朋子
戸田中央病理診断科クリニック 河合 俊明

日本産科婦人科学会の国際交流事業として2015年よりJICA 草の根技術協力事業であるカンボジアにおける子宮頸がんプロジェクトが始まりました。がん検診の精度管理と、適切な癌診療のためには質の高い細胞診及び病理組織診断が必要です。2016年から始まったカンボジアの病理医、病理技師の人材育成事業に参加しています。2024年度の活動をご報告します。

I. 第63回日本臨床細胞学会秋期大会への若手の参加

日本臨床細胞学会のカンボジア交流事業として、第63回日本臨床細胞学会秋期大会には若手病理医2名をお呼びすることができました。

今回は3名の応募があり、病理専門医コースの2期生と病理検査技師の2名が選ばれました。二人とも女性です。

カンボジアのカルメット病院の病理医である Sereiroith Leang 医師は“Challenging case of the ovarian dedifferentiated carcinoma in frozen section analysis by the imprint cytological and the histological features.”として卵巣の脱分化癌の症例を提示しました。

同じくカルメット病院の病理技師である Sokorntheary Moul 技師は“The Practical of Immunocytochemistry in Cambodia”を発表しました。

学会長の進先生のご厚意により、通常より早い時期に発表の日時を確定していただき、招聘状を作成いただきました。ビザの申請にはややこずったのですが、二人は自力でチケットとビザを取得し、成田から幕張の会場まで来てくれました。学会場でも熱心に情報を収集しておりました。特に免疫染色の試薬を取り扱う代理店の所在地についての有用な情報を得たようです。そして学会後は自分の貯金を加えて病理、細胞診、免疫染色を研修して帰国しました。

II. カンボジアにおける学会設立の動き

カンボジアの病理医・病理技師は、学会設立に向けて動き続けています。カンボジアの病理・細胞診に係る人材は現在病理専門コースで学ぶレジデントも含めて20名を越えました。カンボジア病理学会の申請書は、すでにカンボジア内務省に提出したとのこと。しかし、承認されるのには年単位の時間がかかるとのこと。カンボジア産科婦人科学会の設立の時にも2～3年かかったと聞いていますから、これが

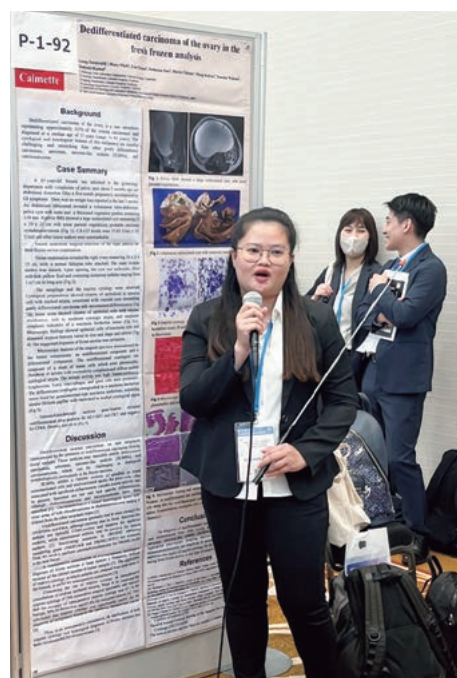


写真1 第63回日本臨床細胞学会秋期大会における Sereiroith Leang 医師のポスター発表。ポスター作製も発表も堂々たるものでした。

カンボジア時間なのかもしれません。

病理医が6名しかいなかった時代には時間をかけて「学会」という仕組みを作る必要はなかったのかもしれませんが、特に専門医コースが始まる前に病理医となった6名は同じプノンペン市内にいてもほとんど交流がありませんでした。しかし、今の中堅どころの病理医は、専門医コースの1期生、2期生です。互いに切磋琢磨し、日本をはじめとする海外での学会、研修に参加した経験も持っています。そして「学会」という仕組みが自分の勉強のためにいかに有用であるか、を経験として知っています。彼らは、時間はかかっても学会設立に向かって歩み続けてくれると思います。

III. 新しいがんセンターの設立と今後の課題

コロナ禍において、コロナ患者のための専門病院として機能していた国立病院の Luang Me Hospital を新しいがんセンターにするとの首相令が出され、病理部を設立することも決まりました。

まだ病理部は機材の選定を行っている段階ですが、University of Health Sciences 解剖病理学教室の教授で病理



写真 2 これまでともに支援して下さいました先生方との記念写真。
前列右から Sereiroith Leang 医師, Sokorntheary Moul 技師, カンボジア交流事業
をご指導くださった藤田則子先生（長崎大学）, 松本安代先生（神戸大学）

専門医コースの責任者である Prof. Chhut Serey Vathana がサポートする形で、病理専門医コース 2 期生として専門医になったばかりの Kimseang San 医師が病理部の責任者として着任しました。これから、カンボジアで最初のがんセンターであるクメールソビエト病院、2 番目のがんセンターであるカルメット病院の病理部の協力を得ながら、病理技師を養成し、Kimseang San 医師自身もタイで研修を受けて、Luang Me Hospital の病理部を運営していくことになっています。

カンボジアの人口は約 5000 万人です。いくら増えたとはいえ、病理診断を生業とする医師はやっと 20 名です。その内訳は専門医になりたてが 5 名ですし、専攻医が 9 名です。今後も継続的な交流、支援が必要なことは明らかです。そして、学会が設立した暁には学会運営のノウハウも必要になるかと思います。

カンボジアでは経済発展に伴い、診療レベルが向上し、病理診断、細胞診断に対する需要も増加しています。私たちがカンボジアで病理人材育成に関わりだした 2016 年時には呼吸器検体はほとんどありませんでした。現在は、クメールソ

ビエト病院では肺切除が、カルメット病院では肝切除が行われるようになり、呼吸器や肝胆膵の生検および手術検体の病理診断も必要になっています。また、クメールソビエト病院ではカンボジアで増加する腎不全の鑑別診断のために腎生検を始めようと、腎臓内科と病理部が準備を始めています。2024 年 12 月に神戸大学医学部附属病院病理部でクメールソビエト病院の病理技師 2 名が研修させていただきました。また、今後、子宮がん検診が広く行われるようになれば子宮頸部前がん病変及び微小浸潤癌も多く発見されるようになるでしょう。精度高く診断する病理診断が無くては、腫瘍の治療効果は上がりません。カンボジアの人々が適切な病理診断サービス、がん治療を受けられるようになりますよう、これからも皆様のご支援、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

（原稿作成にあたり、ご指導くださいました神戸大学大学教育推進機構 グローバル教育センター海外派遣教育部門 松本安代先生に深謝いたします）

細胞診専門医試験に合格しました

杏林大学産科婦人科学教室 渋谷英里子

2023年度細胞診専門医試験に合格し、この専門医会報に寄稿する機会をいただきましたことを、厚く御礼申し上げます。

2011年に杏林大学を卒業し、杏林大学医学部附属病院で初期研修を行い、産科婦人科学教室に入局しました。初期研修のローテーションでは産婦人科に関連する科を選択しようと考え、病理を選びました。偶然にも婦人科の次に病理というローテーションの順となり、婦人科で手術に入った症例の標本を実際に顕鏡することができました。このことが病理に興味を持つ最初のきっかけになりました。

入局後は日々の臨床をこなすことでいっぱいになってしまい、病理についてはそれ以上の学びを深めることができずにいました。その中でも日本臨床細胞学会の発表の機会で細胞診について少しずつ知識を増やしていきました。産婦人科専門医を取得した後は、次の目標として細胞診の専門医取得を目標に掲げましたが、結局試験を受けたのはその数年後の産休明けとなってしまいました。しかし、始動が遅くなったことは、結果的に私のような子育て医師にとってのメリットであったかもしれないと考えています。理由はいくつかあります。細胞診診断学セミナーはオンライン受講で、子どもが寝た後や隙間時間に落ち着いて受講できました。また、ポストコロナで顕鏡試験はバーチャルスライドとなり、バーチャルスライドは初めてのものでしたが、普段顕微鏡に触れる時間が少ない（時短勤務では顕微鏡を練習する時間が取れない）私にとってはまだ使いやすいかもしれない、という印象でした。さらに8月に開催された顕鏡実習は土・日の朝～夕方までの日程でしたが、母校の保健学部が会場だったので受講することができたのも幸いでした。

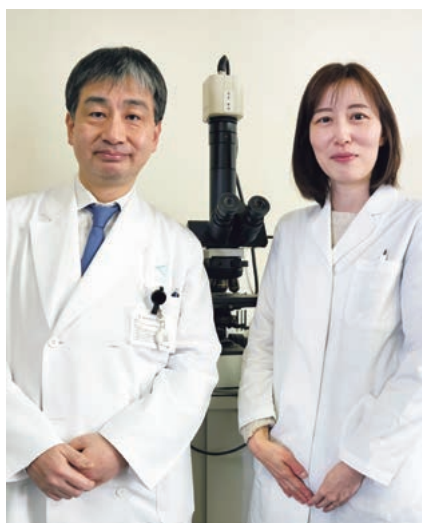


写真1 森定先生と筆者

受験初回は、やはり婦人科以外の科はやってもやっても頭に入らず厳しい状態で、自信のないまま試験当日を迎えることとなり、結果は不合格でした。次年度に再チャレンジするも不合格。このままあきらめるわけにはいかないと改めて気持ちを入れ直し、診断学セミナーと顕鏡実習の受講、毎日問題集を開きました。他の先生方が臨床の場や顕鏡演習で日々知識を得ているだろう分を補うため、ポケット細胞診アトラスや細胞診Quizの本を常に持ち歩いて隙間時間も無駄にしないよう取り組みました。受験当日は子どもが発熱するというアクシデントがありながらも、試験会場に向かい、3度目の正直で合格することができました。最後まで励まして下さった森定先生には感謝しきれません。

新専門医紹介に私の体験を寄稿するにあたり、私の経験は公表しても皆様の役に立つのだろうかと思うべきか迷いました。病理部に通って顕鏡演習しながら学んだというような本来あるべきストーリーではありません。しかし、子育て真っ只中でも専門医を目指して奮闘したことが、誰かの専門医を受験する意欲につながってくれたらと思い、書かせていただきました。リスキリングやキャリアアップなどが言われていますが、勉強の時間を捻出することは容易ではありません。さまざまな制約がある中でも焦らずに、自分のできる方法で学び続けることが、専門医取得につながるということをお伝えできればと思います。

専門医を取得しここからがスタートであり、もっと多くのことを学んでいきたいと思っています。

最後になりましたが、学会発表のたびに細胞診のスライド写真を丁寧にご指導頂きました細胞検査士の坂本憲彦さん、杏林大学婦人科学教室の小林教授をはじめ諸先生方に心より感謝申し上げます。これからもご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

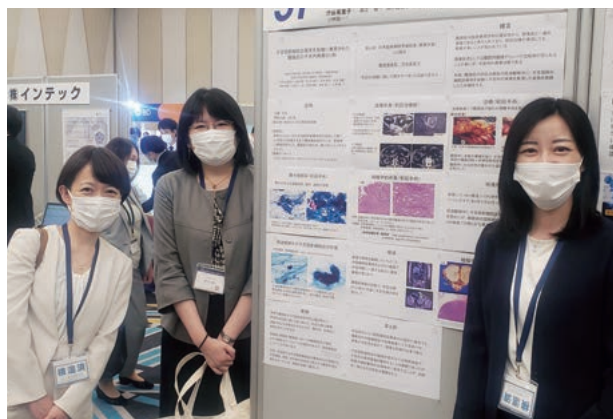


写真2 百村先生、西ヶ谷先生、筆者

この度、細胞診専門医試験合格にあたり、専門医会会報に寄稿する機会をいただきました。森谷卓也先生はじめ、関係各位の皆様方に深く感謝申し上げます。

私は受験時点では会報の存在自体を存じ上げず、この原稿が受験前の先生方の目に留まるかは疑問ではありますが、過去の新専門医紹介記事を拝読したところあまり試験対策に特化した話は見当たりませんでした。そこで、受験から10ヵ月が経過し消えゆく記憶をかき集めながら、試験を目指す先生方に向けた具体的なアドバイスをお届けできればと思います。

私は初期研修修了後、病理の専攻医研修3年を終えた翌年にあたる医師6年目の2023年度に病理専門医試験を受験し、そのまま同年度の細胞診専門医試験を受験いたしました。最短で受験を考える方は、病理専攻医3年目（医師5年目）のうちに日本臨床細胞学会に入会しておけば受験可能です。病理専門医試験が2023年9月末、細胞診専門医試験が2024年2月頭でしたが、勉強期間として短すぎるとは感じませんでした。細胞診専門医の出願開始時点ではそもそも病理専門医試験の勉強真っ只中であり、細胞診の知識はほとんどゼロなのに受験などできるのか…と不安になるかと思いますが、何とかかなりますのでとりあえず入金してみてください。

他科の先生と比べますと、全臓器のある程度の組織学的な知識が頭に入っている点は、受験に関して病理専門医の大きなアドバンテージであると感じました。特に病理専門医受験のタイミングではある程度まとまった知識として頭に入っている状態ですし、勉強内容が細胞診専門医試験にも直結するため、一気に両試験を終えることをおすすめします。

使用した教材は以下の通りです。病理専門医試験にも細胞診の問題が50点分出題されますので、病理専門医受験前の時点で、取っ付きやすい「読む・解く・学ぶ 細胞診 Quiz50（ベーシック編・アドバンス編）」「ポケット細胞診アトラス」をクイズ感覚でざっと2周ほど読みました。参考書としては「細胞診アトラス 細胞・組織相関と最適なマネジメントのために」を使用しました。イラストや画像が多く非常に読みやすく、今も度々開いています。病理専門医試験終了後は、通勤の電車の中で、PDF化した「細胞診セルフアセスメント」「細胞検査士 細胞像試験問題集」をパラパラ解いていました。難しく嫌になりますが、たくさん写真をみているうちに少しずつ見慣れて、正解できる問題が増えるようになりました。振り返ってみれば、この2冊は試験勉強としてはオーバーでしたが、これらに慣れていたおかげで試験本番はかなり解き

やすく感じました。また、試験3日前に「自己採点方式 細胞診スライドカンファレンス問題集 Cyto-Check」を病院の本棚に発見し解いてみました。問題が易しめで、試験直前に解くと自信がつくのでおすすめです。本番の難易度に一番近かったのはこの問題集だったと思います。

実際の鏡顕にあたっては、日々提出される症例（陽性例のみでも）にざっと目を通す、勉強用スライドをみる、といった独学の他、細胞検査士さんと一緒に鏡検しながら教えていただく時間を設けました（週1回、30分程度）。「萎縮性膀胱炎は優しい背景」、「正常子宮内膜は全部に一気にピントが合う」といった口語的なアドバイスは、参考書よりもやはり印象に残りやすく、学習効果が高かったです。

その他の雑多な感想を箇条書きで記してみます。

- ・出題される疾患は婦人科＞呼吸器＞＞その他、です。試験対策としてはある程度諦める分野であってもよいかもしれません。

- ・「NILM か ASC-US か」「CIN2 か CIN3 か」といった微妙な判定は求められません。「NILM か LSIL か」「LSIL か HSIL か」の判定ができれば十分です。

- ・バーチャルスライドに注目すべき細胞を示すマークはありません。が、舐めるように探さないと対象の細胞がない…というような問題は少なかったと記憶しています。写真問題はカラー印刷がとても綺麗でみやすかったです。

- ・筆記試験問題は、日本臨床細胞学会イエローページに掲載されている過去問5年分程度に目を通して大体の内容を把握しました。細胞診専門医研修要綱（学会HPの「資格認定試験について」からリンクでとべます）の総論、「細胞診業務の精度管理ガイドライン」（検索でトップにでてきます）は読んでおくことをおすすめします。また、免疫染色関連の問題など、病理専門医試験の知識が流用できる問題もかなり含まれます。

- ・（当たり前ですが）採取方法を見落とさないようにしてください。スメアと思い込んでいるとLBCだったりします。

- ・全体の感想としては、病理専門医試験の細胞診問題よりも易しめでした。選択肢もありますし、ストレートな問題が多く解きやすかったです。

細胞診専門医としてのスタートラインには立ちましたが、まだまだ実力不足で学ぶべきことばかりです。今後も細胞診の勉強を続けて実践を重ねながら、診断精度を向上させたいと思います。受験を検討されている皆様の参考になれば幸いです。今後ともよろしくお願い申し上げます。

2023年度細胞診専門医試験に合格して

日本歯科大学新潟生命歯学部病理学講座

大野 淳也



この度、2023年度細胞診専門医試験に合格し、本誌に寄稿させていただきます。日本歯科大学新潟生命歯学部病理学講座所属の大野淳也と申します。今回このような機会を頂きました会報編集委員長の森谷卓也先生をはじめ、関係各位の皆様方に厚く御礼申し上げます。

私は、歯科医師国家試験合格後、1年間の臨床研修を終え、すぐに今の病理学講座に入局し、口腔病理医として研究する傍ら、病理組織診および細胞診を行っている従事者の一人です。普段は所属の大学の口腔外科からの検体や、校友会会員の開業医（本学出身の先生）からの切除検体や細胞診検体を担当しております。

私自身は、入局してから数年間はあまり細胞診に接する機会が少なく、実際の症例で診断することもそれほど多くはありませんでした。私の施設では、従来法の塗抹による検体採取、診断を行っていましたが、4～5年前に今の病理学講座の臨床検査技師の職員が入れ替わったタイミングで、液状化検体細胞診（以下LBC）を導入するようになりました。また、従事年数が長くなるにつれて検体数も増えてくるなどのさまざまな要因があり、細胞診専門歯科医を目指すこととなりました。本格的に勉強を始める前までは、オレンジGに染色される細胞、ライトグリーンに染色される細胞の評価がなかなか難しく、口腔病理専門医を取得している上司の先生から教わり、少しずつ理解を深めることができました。

環境的には、決して症例数が多いとはいえない状況ではあったのですが、私自ら口腔外科の外来で細胞診を施行される患者様の口腔内状況を確認し、口腔内写真も口腔外科から取り寄せながら診断にあたってきました。そして、組織診の結果とも対比させながら1例1例を大切に、細胞所見のみ

ではなく、臨床の情報も網羅的に参照して診断することで、実力がついていったように感じます。現在のところ、LBC検体は診断のみに用いている状況ですが、遺伝子の検査、免疫染色、特殊染色ができるなどのメリットがあることが、今回の勉強を進めていくうちにわかってきました。当院では近年、さまざまな事情から組織診は行えない状況にある患者様から、細胞診のみを行ってほしい、という症例が増えているように感じております。このため、今述べた追加検索を行うことができれば、細胞診のみでも確定診断に近い推定診断を行うことができ、より臨床のほうにも貢献できるのではないかと考えています。

専門医試験の勉強についてですが、私の施設に保管してある症例は、もれなく全症例を詳細に、塗抹による方法のスライドとLBCによるスライドの検討を行い、細胞診講習会のテキストや教科書、アトラス、問題集を繰り返し演習しました。受験する数ヶ月前には、朝日大学の落合隆永先生の細胞診講習会を受け、基本から応用までの実力を養うことができたと思います。

今回、細胞診専門歯科医の資格を取得しましたが、口腔病理専門医は現在未取得です。しかし、受験するまでに学んできた内容が、そのまま口腔病理専門医試験で出題される細胞診の問題とオーバーラップする部分が多いと考えられるため、今後の勉強に役に立つと思っています。

専門医資格を取得はしたものの、日々刻々と新しい知見は増えていくので、より精度の高い診断を行うためには、精密な診断や十分な勉強が必要不可欠です。また、口腔外科を中心とした臨床の先生方や大学外の歯科診療所の先生方にも、口腔の細胞診について普及することができるよう努力しています。日本臨床細胞学会の発展に貢献していきたいと考えております。改めまして、今回の受験にあたり、ご指導や情報を下さった岡田康男先生、教室員の皆様、その他関係各位に感謝申し上げます。

東岩井 久 先生を偲んで

公益財団法人宮城県対がん協会 細胞診センター 所長 伊藤 潔

去る令和6年9月13日、日本臨床細胞学会名誉会員、宮城県対がん協会細胞診センター初代所長、学術顧問、仙台市立病院名誉院長 東岩井久先生がご逝去されました。享年89歳、宮城県と日本の子宮がん検診を黎明期から担ってこられた先生の突然の訃報に、深い落胆と悲しみを覚えています。私は先生の数代後の細胞診センター所長を務めていますので、その立場から記述させていただきます。

先生は昭和10年、石巻市のお生まれで、小学校から仙台一高、そして東北大学医学部大学院ご卒業までずっと仙台で教育を受けられ「根っからの仙台人」と自称しておられました。

東北大学医学部をご卒業後、同産婦人科教室の第3研究室（現腫瘍グループ）に入られたのは昭和37年ですが、奇しくもこの年は南方村で宮城県初の子宮がん集団検診が行われた年でもあります。先生はそれ以来一貫して子宮がん検診と細胞診断学に携わってこられました。宮城県対がん協会では昭和50年度から検診センター副所長として検診体制の構築に尽力され、子宮がん検診の根幹は細胞診検査であるとの信念から、昭和56年度には細胞診センターを創設し、初代所長として陣頭指揮に立ち、宮城県の子宮がん検診の拡充・発展を図られました。また質の高い精度管理を目指し、細胞診指導医と細胞検査士が一体化できる体制を確立しました。宮城



東岩井 久 先生
令和6年9月13日ご逝去 享年89歳

略歴・受賞歴

- | | |
|-------|--------------------------------|
| 昭和36年 | 東北大学医学部医学科 卒業 |
| 昭和37年 | 東北大学医学部産婦人科学教室 入局 |
| 昭和50年 | 宮城県対がん協会検診センター 副所長 |
| 昭和56年 | 宮城県対がん協会細胞診センター 所長
(平成8年まで) |
| 平成10年 | 第37回日本臨床細胞学会秋期大会 大会長 |
| 平成11年 | 仙台市立病院病院長 (平成13年まで) |
| 平成13年 | 村口きよ女性クリニック 顧問 |
| 平成15年 | 平成15年度日本対がん協会賞 (個人の部) |



平成15年9月17日
東岩井 久常任理事
「日本対がん協会賞」受賞

県の子宮がん死亡率は受診者の増加とともに次第に減少し、検診開始当初の12.1（/10万人対比）から平成6年度には4.0へと1/3に減少し、全国最低となりました。平成10年に先生が主催された第37回日本臨床細胞学会秋期大会では「宮城県における婦人科集検の歴史」として、このことを会長講演なさっています。さらにこれらの業績により、平成15年度には日本対がん協会賞を受賞しました。平成8年に所長を退任なさった後も、仙台市立病院病院長などでご多忙な中、当協会の理事、ついで学術顧問として、協会を支えてくださいました。

先生のご趣味は多彩でした。一つは山歩きで、77歳の時に（！）エベレスト街道のトレッキングをなさったとのこと。そしてもう一つは、合唱です。小学4年生の時にNHKの仙台放送児童合唱団の1期生として合唱と関わりをもって以来、歌うことを趣味とし、茶畑男声合唱団（仙台一高OBで結成）や「HKジュニアコーラスGサンズ」に所属し、演奏会である「バリトン」の美声を披露していたとのこと。

令和6年6月に発刊された細胞診専門医会会報第60号には「指導医番号“0069”として」と題した寄稿を寄せられ、ご自身の細胞診断学との関わり、シカゴ大学留学時の思い出、そしてベセスダシステムに先駆けてⅢ腺という亜分類を設定

したこと、などを述べられていますので、ぜひご一読いただければと思います。奇しくも此の原稿が、先生の細胞診断に関わる絶筆となりました。

私にとって先生は年齢も四半世紀ほど違い、はるかに仰ぎ見る存在でしたが、学会や協会ではいつも気軽に声をかけてくださりました。令和4年に私が主催した第61回日本臨床細胞学会秋期大会では顧問となっただき、大所高所からご意見を頂きましたが「おい伊藤君、ゲルは大丈夫か？」と、ご自分が昔、開催に苦勞したこともあったか（？）、金銭面でのことを盛んに心配してくれる、ありがたい大先輩でした。

先生の細胞診への情熱は終生変わらず、亡くなられた年も月1回、7月まで、細胞診断のために来協なさっていました。また細胞診の勉強会には必ずご出席され、的確で鋭い質問に、驚かされることも多々ありました。協会にいらっしゃり、検査士の方々と共に、細胞診断を始めるときの「お～い、診断は始めるぞう～！」との、頼りがいと優しさを奥にひそめた美声が、もう聞けなくなるのは本当に残念でなりません。

先生、どうぞ、安らかにお眠りください。心からご冥福をお祈りしております。合掌。

（東岩井先生が長らく顧問をしておられた村口きよ女性クリニックの「きよくりNEWS」から多くのエピソードを頂きました。村口きよ先生に心から感謝申し上げます。）

WHO 細胞診 Blue Book 第3弾「リンパ節・脾臓・胸腺」 刊行のお知らせ

(株) LSI メディエンス 病理・細胞診ラボラトリー
日本医科大学 統御機構 診断病理学

細根 勝

細胞診専門医会の皆さま、お知らせです。WHO による細胞診報告書様式シリーズの第3弾、WHO Reporting System for Lymph Node, Spleen, and Thymus Cytopathology (初版, 2024 年):いわゆる「WHO 細胞診 Blue Book:リンパ節・脾臓・胸腺」の「冊子体」がついに完成・出版されております。学会の書籍展示などでお見かけの際は是非一度、お手にとって中をご覧頂けましたら幸いです。これはシリーズ既刊、WHO Reporting System for Lung Cytopathology (初版, 2022 年), WHO Reporting System for Pancreatobiliary Cytopathology (初版, 2022 年)に続く第3作目として、本年 2025 年 1 月に最終的な冊子体が上梓されております。その間の道のりは意外に長く、2021 年 3 月に第一回目の Virtual Editorial Board Meeting, via Zoom が開催されて以来、COVID-19 の影響による停滞・遅延なども含めて約 3 年半の準備期間と、計 3 回の Zoom meeting を経て、ようやく目の目を見た「完成品」となります。先行二冊と同様、本書も WHO に加えて International Academy of Cytology (IAC),

International Agency for Research on Cancer (IARC) の三者による共同刊行となっております。

今回は 6 人の Standing members と、彼らを選出した 17 人の Expert members を中心に、総計 41 人が執筆を担当しております。装丁は全 253 ページ、厚さは 15mm、重さは 770g と「程よい厚さと重量感」を保っており、章立ての巧みさを含めて、内容的にはかなり高度かつ実地的な記述がなされています。特に前半部分の穿刺吸引細胞診 (FNAB: WHO は FNA, FNAC よりはこの term を好みます, B は Biopsy) のテクニック, ROSE, 超音波ガイド下の FNAB, 検体処理のアルゴリズムなどの「必須項目」に加え、flow cytometry, 免疫細胞染色, ISH, 分子遺伝学的検索などの「補助診断技術: Ancillary testing」に及ぶ一連の記載は、この領域の最新知見をここでまとめて「一気読み出来る!」という意味では非常に有り難く、リンパ節細胞診に携わる専門医の先生方、細胞検査士の方々にも「知識の整理」という意味では大いに役立つ資料になると考えられます。私は長らく「リンパ節の穿刺吸引細胞診と flow cytometry 併用の有用性」に関する検討を行って参りましたが、そんなマニアの視点から見ても教えられることの多い内容であると思いました。また、そもそも「脾臓」や「胸腺」の細胞診自体が珍しく、まとまった写真を見る機会も少ないので、それだけでも本書を手もとに置く価値があるかと思われます。

また、実際の細胞診断に関しては (通常の) 5 段階の category に分けた後、その結果をどのような様式 (Reporting System) で報告するかに関しては「Diagnostic categories and report structure」という章が用意されておりますが、ここは短いながらも本書のキモに当たる部分の一つと考えられます。それに加えて ROM (risk of malignancy) や推奨される患者マネージメントの提示 (経過観察, FNAB 再検, 生検など)、具体的な「報告書の見本: sample report」なども紹介されていますが、ここまで踏み込んだ内容の記載を見ると、今後、この領域でなすべき我々の課題を見事に言語化してくれたと言う思いが致します。これらの報告書様式の根底を支えるのが 2020 年に提唱された Sydney System ですが、この新しい報告システムに関しては、国内施設に於ける実験的な使用経験や、日本の医療保険制度下での運用の可否などを検討すべく、すでに第 63 回日本臨床細胞学会総会 (2022 年 6 月, 東京) で学術シンポジウムが開催され、会員の皆さ

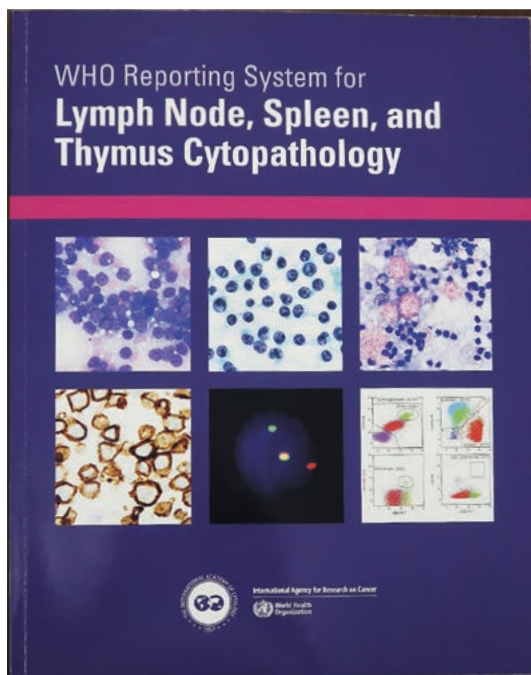


写真 1 冊子体の表紙: WHO Reporting System for Lymph Node, Spleen, and Thymus Cytopathology (初版, 2024 年)

6 枚の印象的な写真が並んでいます。

今回は「表紙の一枚」にも選んで頂きました。

まにも Sydney System の概要や解決すべき問題点などの共有が図られております。

加えて、一般に細胞診では推定診断が難しいとされる各種リンパ腫に関しては、細胞の出現様式を独自の4つのパターンに分けた上でアプローチして行く方法が紹介されております。このアイデア自体は以前からある定番的プロセスではありますが、今回はより使い易く、より効果的なパターンを捻出するため、毎回 Zoom のリモート画面から、その熱いエネルギーが伝わって来る程の活発な議論が交わされていたことを思い出します。一方、個々の掲載写真は日本人の美意識からするといささか受け入れ難いクオリティーのものも含まれてはいますが、これらは総じて欧米人の細胞診写真に対する基本的な趣向を反映しているようにも思われ、これはこれで一歩下がって、彼らの「思想」を冷静に受け止めた方が賢いのかも知れません。また、本書の(冊子体ではなく)「web 版」を購入された場合、第5版 WHO 分類・造血器編 (WHO-HAEM5, 2024 年) との誌上リンクも充実しており、このサー

ビスもまた極めて「今風」かと思われます。

—以上、新しい WHO 細胞診 Blue Book 第3弾の刊行ニュースとその発刊経緯、注目すべきポイントなどを駆け足で紹介させて頂きました。既刊二冊のシリーズにはそれぞれ複数名の日本人の先生方が参画されていますが、今回のこの Blue Book では Expert member の日本人は私一人だけでしたので、途中、情報不足や孤立化に陥ることもしばしばで、この点、この方面の国際交流について経験豊富な会員の先生方には毎回いろいろとご教示を頂き、心より感謝しております。また、お蔭様で私は 2004 年(平成 16 年)～2023 年(令和 5 年)までの 20 年間、日本臨床細胞学会・教育委員会主催「細胞診断学セミナー」の「リンパ節・縦隔・骨髄」部門の講師を—幸いお休みすることなく—担当させて頂きましたが、この講師期間中に、その当時は受講生(受験生)であった細胞診専門医の先生方から頂いたご質問、ご助言の数々はこの度のプロジェクト完遂にも大いに役立っており、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。

LYMPH NODE SYMPOSIUM 3
May 8, 2019, Sydney, Australia

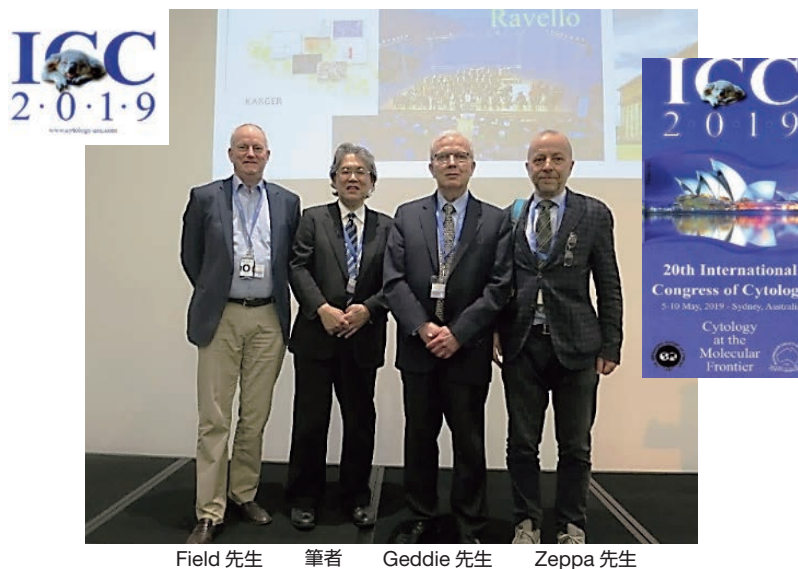


写真 2 WHO のリンパ節細胞診・Expert members の先生方と
この写真は第 20 回 International Congress of Cytology (2019 年, Sydney) の LYMPH NODE SYMPOSIUM 3 の終了直後に撮られたものです。
左から Standing member 兼 Expert member の Andrew Field 先生、Expert member の(筆者)、William Geddie 先生、Pio Zeppa 先生です。

2025年度細胞診専門医資格更新について

細胞診専門医委員会委員長 近内 勝幸

2025年度は下記の方が対象となります。

2025年度細胞診専門医資格更新対象者ナンバー
684-773, 1102-1170, 1387-1446, 1647-1710,
2029-2159, 2477-2577, 2850-2961, 3223-3325,
3731-3784, 8041-8045, 8079-8080

平成25年度より学会の公益社団法人化とともに細胞診専門医資格更新制度が改革され、細胞診専門医会出席義務廃止、同専門医会、学術集会、研修指定講座、地域連携組織活動等への参加クレジット重視の方向性となっております。細胞診専門医の方は、今後とも学術集会（本法人ならびに関連学会）参加章等、各種出席証明を大切に保管していただけるようにお願いします。

2020年より5年更新で新単位制度にて更新申請の為、「細胞診専門医資格更新実務に関する施行細則」をよくご確認ください。

詳細はイエローページやホームページ等で後日あらためてご案内いたします。

なお、長期海外出張、病気療養、出産・育児などのため資格更新に必要な業績単位を満たせなかった方は、上記の理由と期間を確認することのできる診断書、証明書、あるいは確認書などを添えて学会事務局に資格更新時に、申請書と共にご提出ください。細胞診専門医委員会は資格更新審査会にて、このような方を資格更新保留者と認定することができます。同時に保留（休止）期間を判定して本人に通知いたします。

なお、更新期間の延期・変更はありません。

2025年度細胞診専門医資格更新スケジュール（予定）

2025年11月中旬	更新対象者に更新案内メールを送信 ※メールアドレス登録の無い方には封書でご案内
2025年12月10日	更新申請締め切り（必着） Web申請で行う予定（Webで出来ない方は案内がお手元に届き次第事務局へご相談ください）
2026年2月	資格更新審査会にて審査
2026年3月中	更新結果通知

2025年度細胞検査士資格更新申請について

細胞検査士資格更新審査委員会委員長 井上 健

2025年度は下記の方が対象となります。

2025年度細胞検査士資格更新対象者ナンバー
(イエロー・カード)
10385～10636

①細胞診業務単位としては、以下のように規定されています。いずれも1年間に取得できる単位の上限は25単位です。

- a 常勤の場合 1年間に25単位
- b 非常勤の場合
 - 1) 週5～6日勤務の場合 1年間に25単位
 - 2) 週3～4日勤務の場合 1年間に20単位
 - 3) 週1～2日勤務の場合 1年間に15単位

しかしながら、最近の社会情勢では雇用形態として常勤ポストが減少する傾向にあり、専任業務であっても“非常勤”として細胞診業務に従事されている場合があります。

更新申請の際、“非常勤”の方であっても細胞診専任業務に従事されている場合は勤務状態を文書で申し出ていただければ、この点を勘案して資格更新審査をいたします。ただし、資格更新に必要な所定の条件を満たしている方はこの限りではありません。

②長期海外出張、病気療養、出産・育児などのため資格更新に必要な所定の出席回数（日本臨床細胞学会学術集会春期大会・秋期大会、細胞検査士教育セミナー、細胞検査士ワークショップのいずれかに5年間に2回以上）と業務・業績などで規定の単位を満たせなかった方は、上記の理由と期間を確認することのできる診断書、証明書、あるいは確認書などを添えて学会事務局に申請してください。そのような書類

が無い場合は、登録専門医、地域連携組織長あるいは所属長などと連名で事情説明書を提出してください。細胞検査士資格更新審査委員会はこのような方を資格更新保留者と認定することができます。なお、更新期間の延期・変更はありません。

新制度により、細胞検査士資格を更新できなかった方は、認定試験を2次試験から再受験できるようになりました。

ただし、日本臨床細胞学会をいったん退会された方は1次試験からの受験が必要です。

詳細については、学会事務局ホームページをご確認ください。

※自然災害等により更新に支障が発生した方は、その状況を記載して更新手続き願います。審査会にて審議・検討いたします。

2025年度細胞検査士更新スケジュール（予定）

2025年11月中旬	更新対象者に更新案内メールを送信 ※メールアドレス登録の無い方には封書でご案内
2025年12月15日	更新申請締め切り（必着） Web申請で行う予定（Webで出来ない方は案内がお手元に届き次第事務局へご相談ください）
2026年2月	更新審査会にて審査
2026年3月中	更新結果送付 （新細胞検査士カード等一式）

日本臨床細胞学会 細胞診専門医会総会議事録

日 時：2024 年 6 月 9 日（日）

午後 3 時 00 分～午後 5 時 00 分

場 所：第 1 会場（大阪国際会議場 5 階メインホール）

会長挨拶：青木 大輔

A. 細胞診専門医セミナー（午後 3 時 00 分～午後 4 時 00 分）

座 長：青木 大輔（国際医療福祉大学大学院／赤坂山王
メディカルセンター）

演 者：清水 俊来（厚生労働省健康・生活衛生局がん・
疾病対策課）

演 題：「対策型がん検診の最近の動向」

B. 報告・協議事項

報告・協議事項に先立ち、青木会長より出席・委任状含め
て本会が成立していることが確認された。

1. 庶務担当報告（若狭朋子 庶務担当総務）

- (1) 2023 年度第 2 回細胞診専門医会総会議事録の確認
- (2) 細胞診専門医会に関する施行細則の確認
- (3) 総務・各種委員会構成の確認
- (4) 細胞診専門医数ならびに物故会員：

2024 年度総務庶務報告（2024 年 5 月 22 日現在）

全会員数：13,093 名

（正会員 5,611 名，準会員 7,229 名，名誉会員 40 名，
功労会員 200 名，図書会員 13 件）

細胞診専門医および細胞診専門歯科医数：3,188 名（実数）

（認定：細胞診専門医 4,131 名，細胞診専門歯科医
124 名）

FIAC：71 名 MIAC：23 名

細胞検査士数：8,185 名（実数）（認定 11,513 名）

CT（IAC）：3,878 名

【物故会員】

《功労会員》

No. 0071 利部 輝雄先生（公益財団法人岩手県対がん協
会いわて健康管理センター）

2023 年 6 月 10 日ご逝去

No. 0292 山内 一弘先生（（株）ピーシーエル ジャパン
細胞診断部）

2023 年 11 月 21 日ご逝去

《細胞診専門医》

No. 0625 天野 信人先生（徳田病院）

2023 年 4 月 21 日ご逝去

No. 0748 佐藤 雅美先生（鹿児島大学医学部・歯学部附
属病院 呼吸器外科）

2023 年 8 月 6 日ご逝去

No. 0771 上野 洋男先生（（NPO 法人）札幌診断病理学

センター）

2024 年 3 月 26 日ご逝去

No. 0878 高橋 洋平先生

2024 年 2 月 6 日ご逝去

No. 2280 青木 陽一先生（琉球大学大学院 医学研究科
女性・生殖医学講座）

2023 年 7 月 25 日ご逝去

No. 3336 板倉 淳哉先生（倉敷中央病院 病理診断科）

2024 年 1 月 13 日ご逝去

黙禱

2. 事業報告（若狭朋子 庶務主担当）

- (1) 細胞診専門（歯科）医が業務を円滑に遂行できるよう
支援を行った。
- (2) 細胞診専門医による細胞検査士指導の実態を把握し調
整を行った。
- (3) 集会の開催

1：専門医総会の開催 6 月 11 日（日）15：00～17：00
（現地開催）

- (4) 細胞診断の質を維持，向上させるための研修に関する
事業

以下の演題を細胞診専門医研修指定演題として認定した。

細胞診専門医セミナー

6 月 11 日（日）15：00～17：00（現地開催）

「令和時代の細胞診専門医と細胞検査士～未来志向の関係
構築にむけて～」

座長：青木 大輔（国際医療福祉大学大学院）

講師：山下 博（国立病院機構東京医療センター産婦人科）

阿部 仁（がん研究会有明病院臨床病理センター・
臨床検査センター）

安田 政実（埼玉医科大学国際医療センター病理診
断科）

医療安全セミナー

6 月 10 日（土）10：10～11：10（現地開催）

「ワクワクする医療提供のための医療の質管理」

座長：井上 健（大阪市立総合医療センター病理診断科）

講師：安田 あゆ子（藤田医科大学病院医療の質・安全対
策部医療の質管理室）

医療倫理セミナー

6 月 11 日（日）13：40～14：40（現地開催）

「今日，医療者に求められる医療倫理，研究倫理」

座長：伊藤 仁（東海大学医学部付属病院診療技術部病理
検査技術科）

講師：飯島 祥彦（藤田医科大学医学部生命倫理学）

感染対策セミナー

6 月 10 日（土）11：30～12：30（現地開催）

「新型コロナウイルス感染症ががん検診とがん診療にもた

らした影響」

座長：生水 真紀夫（千葉大学真菌医学研究センター）

講師：川名 敬（日本大学医学部産婦人科学系産婦人科学分野）

細胞診専門医領域講習

◇精度管理アドバイザー講習会（アドバイザー講習 C）

6月11日（日）10：05～11：05

「今後の子宮頸がん検診と精度管理を再考する」

座長：齋藤 豪（札幌医科大学）

講師：戸澤 晃子（聖マリアンナ医科大学産婦人科）

◇海外招請講演（アドバイザー講習 A）

6月10日（土）15：50～16：50（現地開催）

「Commitment of IFPCP for eradication of cervical cancer: training and education in colposcopy」

座長：宮城 悦子（横浜市立大学医学部産婦人科）

講師：Maggie Cruickshank

（Aberdeen Centre for Women's Health Research, University of Aberdeen, UK）

細胞診専門医セミナー

11月5日（日）14：40～15：40（現地開催）

「HPV 検査の導入を見据えた子宮頸がん検診の精度管理」

座長：青木 大輔（国際医療福祉大学大学院／赤坂山王メディカルセンター）

1. HPV 検査単独法で細胞診はどう変わるかーバイオロジーと形態から考える

講師：三上 芳喜（熊本大学病院病理診断科）

2. アルゴリズムを含めたがん検診プログラムの精度管理

講師：森定 徹（杏林大学医学部産科婦人科学教室）

医療安全セミナー

11月5日（日）8：30～9：30（現地開催）

「医療安全の国際潮流について」

座長：西山 憲一（福岡赤十字病院病理診断科）

講師：後 信（九州大学病院／（公財）日本医療機能評価機構）

感染対策セミナー

11月4日（土）17：20～18：20（現地開催）

「伝播の法則：感染拡大を規定する4因子について」（現地開催）

座長：相島 慎一（九州大学大学院医学研究院構造病態病理学分野）

講師：青木 洋介（佐賀大学医学部国際医療学講座臨床感染症学分野）

医療倫理セミナー

11月5日（日）9：45～10：45（現地開催）

「今般の医の倫理と規制をめぐる課題と展望」

座長：伊藤 潔（宮城県対がん協会細胞診センター）

講師：河原 直人（九州大学病院 ARO 次世代医療センター）

細胞診専門医セミナー

11月5日（日）13：20～14：20（現地開催）

精度管理アドバイザー講習会（アドバイザー講習 B）

「子宮頸部細胞診と分子生物学的マーカー」

座長：横山 良仁（弘前大学医学部産科婦人科学教室）

講師：安田 政実（埼玉医科大学国際医療センター病理診断科）

(5) 会報の発行 No. 59 を発行した。

(6) 細胞診専門医の社会的地位向上のための事業

①「子宮がん検診精度管理アドバイザー・検討ワーキンググループ」および「子宮頸がん検診における細胞診判定の在り方に関するワーキンググループと連携して HPV テスト導入後の細胞診のあり方について議論した。

② 日本専門医機構との情報収集を行った。

以上の報告について、特に異論はなく拍手多数で承認された。

3. 会計担当報告（井上 健 会計主担当）

(1) 2023 年度細胞診専門医会決算案について報告があり、特に質問は挙がらなかった。

(2) 2024 年度細胞診専門医会予算案について報告があり、特に質問は挙がらなかった。

なお、決算については、学会全体の決算の中で先日の総会で承認されたことが報告された。

4. 生涯教育担当報告（森井英一 生涯教育主担当）

細胞診専門医研修指定演題ならびに演者が下記のとおりの報告された。

細胞診専門医セミナー 6月9日（日）15：00～17：00

第1会場（5F メインホール）

「対策型がん検診の最近の動向」

座長：青木 大輔（国際医療福祉大学大学院 / 赤坂山王メディカルセンター）

講師：清水 俊来（厚生労働省 健康・生活衛生局 がん・疾病対策課）

細胞診専門医研修指定講座

◇感染対策セミナー 6月9日（日）13：30～14：30

第1会場（5F メインホール）

「次の新興再興感染症に備える COVID-19 から学んだこと」

座長：若狭 朋子（近畿大学奈良病院 病理診断科）

講師：忽那 賢志（大阪大学大学院医学系研究科 感染制御学）

◇医療安全セミナー 6月8日（土）14：40～15：40

第1会場（5F メインホール）

「Safety-II：変動し不確実で複雑なシステムにおける安全管理マネジメント」

座長：河原 邦光（神戸大学大学院医学研究科 地域社会医学・健康科学講座地域連携病理学分野）

講師：中島 和江（大阪大学医学部附属病院 中央クオリティマネジメント部）

◇医療倫理セミナー 6月9日（日）10：50～11：50

第1会場（5F メインホール）

「臨床研究推進のための留意点」

座長：植田 政嗣（畿央大学大学院健康科学研究科）

講師：山本 洋一（大阪大学医学部附属病院）

細胞診専門医領域講習

◇精度管理アドバイザー講習会（講習 C）

6月9日（日）9：40～10：40 第1会場
「わが国における子宮頸がん検診の施行形態 一職域でのがん検診の現状と課題を中心に―」

座長：齋藤 豪（札幌医科大学医学部 産婦人科学講座）

講師：松浦 祐介（産業医科大学 産業保健学部 広域・発達看護学）

◇特別講演（アドバイザー講習 B）

6月8日（土）10：50～11：50 第1会場
「Advances in Molecular Cytopathology」

座長：長村 義之（日本鋼管病院 病理診断科 / 慶應義塾大学医学部）

講師：Shinchita Roy Chowdhuri（Associate Professor,
Department of Pathology and Laboratory
Medicine, The University of Texas MD Anderson
Cancer Center）

5. 細胞診専門医あり方委員会報告

（齋藤 豪 あり方委員会主担当）

下記について報告がなされた。

議題

1. 細胞診専門医を目指す臨床医が減少していることに関して今後の学会の方向性
2. 細胞診専門医を目指す臨床医を増やすためにはどうあるべきか

以上についてフリーディスカッションを行った。

1. 細胞診専門医は現在病理専門医と臨床専門医の割合が2：1程度であるが、現在の専門医試験合格者は3～4：1と臨床専門医の合格者が減少傾向にある。
 - （ア）細胞診専門医は全科網羅的に勉強しなければならないが、若い人たちは自らの専門医を取るために忙しくなっている。
 - （イ）今後の専門医制度の改革次第では、サブスペを2つ取ることは難しくなり、臨床医にはさらに細胞診専門医のハードルは上がるのではないか。
 - （ウ）婦人科でも細胞診専門医のメリットを感じる人が減っていると思う。
 - （エ）病理医と臨床医が互いにディスカッションできるのが細胞学会の良いところであり、病理医だけの学会になることは望ましくない。
2. 細胞診専門医を目指す臨床医を増やすための方策について。
 - （ア）婦人科腫瘍学会など他学会とタイアップしてリクルートする。
 - （イ）臨床医が細胞診専門医を取るメリットについてもっとアピールする必要がある。
 - （ウ）細胞診専門医試験を臨床医がもっと取りやすくする方策を考える。

（エ）専門医機構の専門医にこだわらなくてもよいのではないか。

3. 全体を通じての意見。

（ア）このことは学会の根幹に関わることであり、今から動かなければ10年後の臨床細胞学会はないといっても過言ではなく、執行部には一層の改革をお願いしたい。

この報告に基づいて学会に対する提言を作成予定であることが青木会長より述べられた。

6. 専門医会会報編集委員会報告

（森谷卓也 編集委員会主担当）

専門医会報第60号が発送されたことが報告された。今後印刷費や郵送費の値上げに伴い、専門医会報のPDF化についても議論を開始する旨が報告された。

7. その他

- （1）細胞診専門医会総務選出について：2025・2026年度の細胞診専門医会総務選出日程が報告された。青木会長より、今後は電子投票の可能性についても検討する予定であることが述べられた。
- （2）会員よりの質問：会場出席の会員より「HPV単独法による子宮頸がん検診において、細胞診を併用してはいけない、というのはおかしいのではないか？根拠を示して欲しい」との意見があった。青木会長より「細胞診を併用した場合、検診の不利益が大きくなるため、細胞診の併用はHPV単独法による検診では認められていない」ことが説明され、本学会でもそれに関する講演は実施されており、論拠となる論文等については、「有効性評価に基づく子宮頸がん検診ガイドライン2019」および子宮頸がん検診エビデンスレポート2019年度版に記載されているので参照して欲しいとの説明があった。

C. 日本臨床細胞学会側からの報告事項

1. 細胞診専門医委員会報告

（近内勝幸 細胞診専門医委員会委員長）

下記のとおり報告された

- （1）2024年度細胞診専門医資格更新についてアナウンスがあった。詳細は後日学会HPで確認することが重ねて案内された。
- （2）2024年度細胞診専門医資格認定試験は、令和7年2月1日にAP浜松町にて実施予定であることが報告された。詳細については学会HPで確認するように案内された。
- （3）細胞診精度管理アドバイザー（子宮頸がん）の資格認定について：初回の資格認定が今年度内に行われる予定であることが述べられた。

2. 細胞検査士委員会報告

(三上芳喜 細胞検査士委員会委員長)

- (1) 2023 年度の細胞検査士資格認定試験が無事終了したことが報告された。
- (2) 2024 年度の細胞検査士資格認定試験の実施予定が下記の通り案内された。

【一次試験】

2024 年 10 月 26 日 (土) 12:00~16:00 (予定)

会場: CIVI 研修センター新大阪東, KITENA 新大阪

【二次試験】

2024 年 12 月 7 日 (土)・8 日 (日) 8:00~21:00 (予定)

会場: 杏林大学三鷹キャンパス 医学部講義棟

3. その他

- (1) 子宮がん検診精度管理アドバイザー・検討ワーキンググループ報告 (齋藤 豪 総務):

田畑 務委員長のもと検討がされており、従来は専門医を対象とした資格認定であったが、昨今の子宮頸がん検診を取り巻く情勢を勘案し、細胞検査士にもその対象を広げる方向性であることが報告された。

- (2) 子宮頸がん検診における細胞診判定の在り方に関するワーキンググループ報告 (田畑 務 ワーキンググループ委員長):

HPV 単独法による子宮頸がん検診が開始された場合、特に ASC-US をの細胞診判定が増える可能性が懸念されるため、細胞診専門医および細胞検査士で構成される本ワーキンググループにおいて、判定のあり方について検討を行う予定であることが報告された。

- (3) IAC 連絡委員会報告 (佐藤之俊 委員長):

1. 庶務報告にあるように、FIAC と MIAC が減ってきている。是非我が国の細胞診専門医が世界的に活躍するために、積極的に資格を取得して欲しい。
2. IAC 試験がデジタル化される予定である。

- (4) 公益社団法人化 10 周年記念事業検討ワーキンググループ報告 (佐藤之俊委員長 岡本愛光理事長)

10 周年記念事業が盛況の内に実施された旨が佐藤委員長より報告され、また、広報企画として若い世代をターゲットとして SNS を通じて細胞診アート展という企画を立案し、実施した。この中には本学術集会内で実施したワークショップや、8 月に東京慈恵会医科大学内で実施されるワークショップも含まれることが報告された。

D. 新細胞診専門医・細胞診専門医会の紹介

細胞診専門医会 総務・各種構成委員会メンバー

(任期：2025 年 4 月 1 日～2027 年 3 月 31 日)

会 長 森谷 卓也

総 務 井上 健 岡本 愛光 河原 邦光 佐藤 之俊 三上 芳喜
南口早智子 森井 英一 森谷 卓也 山下 博 若狭 朋子

○役割担当

庶 務

主 担 当 若狭 朋子
副 担 当 山下 博
担当幹事 豊田 進司 西野 幸治 森定 徹

生涯教育担当

主 担 当 森井 英一
副 担 当 三上 芳喜
担当幹事 前田 一郎

会 計

主 担 当 井上 健
副 担 当 若狭 朋子
担当幹事 孝橋 賢一 中黒 匡人

細胞診専門医あり方委員会

主 担 当 佐藤 之俊
副 担 当 三上 芳喜
担当幹事 松浦 基樹

会報編集委員会

主 担 当 南口早智子
副 担 当 河原 邦光
担当幹事 小塚 祐司

○各種委員会構成

細胞診専門医あり方委員会

委 員 長 佐藤 之俊
副委員長 三上 芳喜
委 員 大橋 健一 近内 勝幸 齋藤 豪 田中 良太 村田 哲也 森定 徹
幹 事 松浦 基樹

会報編集委員会

委 員 長 南口早智子
副委員長 河原 邦光
委 員 荒木 邦夫 大橋 隆治 齊藤 英子 藤原 寛行 湊 宏 村松 俊成
森谷 鈴子
幹 事 小塚 祐司

監 事 青木 大輔

顧 問 植田 政嗣 長村 義之 加来 恒壽 覚道 健一 柏村 正道 亀井 敏昭
藏本 博行 越川 卓 坂本 穆彦 佐々木 寛 上坊 敏子 白石 泰三
土屋 眞一 平井 康夫 安田 允

細胞検査士指導要領

正しい細胞診断を行うために、細胞診専門医(以下専門医)と細胞検査士(以下検査士)とは共同して細胞診業務を遂行すべきである。

専門医は検査士の要請に応じ、その検査士の登録細胞診専門医として学会に登録される。^{※1}

この場合、専門医はその検査士の教育・指導監督を行う義務がある。^{※2}

両者は常に信頼と協力のもとに密接な連絡体制を確立し、技術の向上とともに、よりの確かな細胞診の実施をはからねばならない。

1. 指導の実際

- 1) 検査士と同時検鏡による対話的交流を行うことが最も効果的であるので、可能な限りこのような機会を作るように努める。
- 2) 細胞標本の作製技術、細胞形態の鑑別や細胞学的診断について指導するのみでなく、臨床事項や他検査所見も含む総括的考察にも努め、細胞診の占める役割と意義についても正しく理解させる。
- 3) 細胞診の過小評価(見落とし、誤陰性など)および過大評価(誤陽性)はいずれの場合にも責任が大きいことを専門医、検査士間で互いに共有する。疑陽性、陽性の全症例は専門医の判定が必要であることを正しく理解させ、これ以外の症例でも解釈の難しい採取方法から得られた検体あるいは問題があると検査士が判断した症例については、つとめて専門医に相談させる。専門医は検査士の疑問症例の単なる相談相手としてのみではなく、その検査士のスクリーニングした全標本の判定結果に対して、道義的責任を有していることは十分に認識しておかなければならない。

2. 専門医が他機関に所属する検査士を指導する場合

専門医が他機関の検査士を指導する場合は検査士の所属する施設の施設長と十分連絡し、次のいずれかの形式をとることが望まれる。

- 1) 専門医がその機関の非常勤医師になる。
- 2) 検査士所属の施設長より細胞診指導の依頼を受ける。
- 3) 検査士所属の施設長より当該検査士が指導を受けることについての了解を得る。

とくに当該機関にすでに病理専門医が所属している場合には、綿密な連絡が必要である。専門医はさらに当該機関関係者に対しても細胞診の判定法、精度管理、検査伝票、設備、検査料金の設定など種々の面において助言勧告をすることが望ましい。

3. その他の注意事項

- 1) 診断を訂正する場合や診断に関連した臨床側とのトラブルの場合は、相互に連絡しあい標本を再検討するとともに専門医の責任において対策を講ずる。
- 2) 専門医を依頼された場合には、前述の責任と業務の遂行が可能であるか否かを考慮し、適当と判断した場合に引き受ける。
施設や地域の特殊性などを考慮に入れねばならないが、一般的には10名程度が指導できる限度とみなされ、これを超える場合には他の適当な専門医を紹介することが望ましい。
- 3) 必要に応じ、教育専門医として他の専門分野の専門医を紹介するなど、他の専門医との協力、さらには集団指導システムの導入など検査士が全科的指導を受けられるような体制を考慮することが望ましい。
- 4) 学会や研修会への参加の奨励などにより検査士の能力の維持・向上に努め、細胞診標本の保管整理、検査伝票、設備、技術など細胞診の合理的運営に必要な事項についても適宜助言する。
- 5) 細胞診に関する研究発表についても積極的に指導し、学問的批判に十分耐え得る内容のものを発表できるようにする。
- 6) 検査士の資格更新、住所等の変更、専門医変更に際しては学会の規定に従って的確に申請するように指導する。

^{※1} 細胞検査士の業務及び資格更新に関する施行細則 2. 3)

^{※2} 細胞診専門医の資格認定、責務に関する施行細則 2. 4)5)

公益社団法人 日本臨床細胞学会

細胞診専門医会に関する施行細則

第1章 総 則

(名 称)

第1条 この会は、公益社団法人日本臨床細胞学会細胞診専門医会と称し、英文表記を The Japanese Association of Cytopathologists (JACP) とする。

(事務所)

第2条 この会は、事務所を、東京都千代田区神田駿河台2-11-1 駿河台サンライズビル3階 日本臨床細胞学会事務所内に置く。

(目 的)

第3条 この会は、細胞診断実務に関する医師、歯科医師並びに技師の教育・指導に当たることを目的とする。

(事 業)

第4条 この会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1) 細胞診専門（歯科）医が業務を円滑に遂行できるように支援する。

以下、細胞診専門医は、特別の断りがない限り細胞診専門（歯科）医を意味する。

2) 細胞診専門医による細胞検査士指導の実態を把握し、調整する。

3) 集会の開催。

4) 会報の発行。

5) 本法人委員会等の要請により、委員を推薦する。

6) 諸問題を解決するため細胞検査士会と定期的に協議する。

7) その他この会の目的を達成するために必要な事業。

第2章 会 員

(会員の構成)

第5条 この会は、本法人が認定した細胞診専門医で構成される。

(会員の移動)

第6条 会員は、退会又は転勤などの移転のあった場合、事務所に届け出なければならない。

第3章 役 員

(役員の種類別)

第7条 この会に、会長1名及び総務若干名及び監事2名の

役員を置く。

(会 長)

第8条 会長は、総務の互選により選出され、本法人理事長がこれを委嘱する。

2 会長は本会を主宰し、これを代表する。

3 会長の任期は2年とし、再選を妨げない。

(総 務)

第9条 総務は、細胞診専門医の中から会員の選挙により選出され、会務に関する重要事項を協議し実行する。

2 総務の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、選出時、被選出者は満65歳を超えないこととする。

(監 事)

第10条 監事は会長が候補者を推薦し細胞診専門医会総会の承認を経て決定される。

2 監事はこの会の会計及び会務を監査する。

3 任期は2年とし、再任を妨げない。

(幹 事)

第11条 この会の業務を処理するため必要な幹事を置く。

第4章 会 議

(細胞診専門医会総会)

第12条 細胞診専門医会総会は、日本臨床細胞学会春期大会時に開催する。

2 細胞診専門医会総会においては、以下の事項について報告する。

1) 事業計画及び予算

2) 事業報告及び収支決算

3) その他運営に関する重要事項

3 細胞診専門医会総会においては以下の事項について承認を求める。

1) 運営に関する重要事項

4 総会の議事は、出席会員の過半数をもって決する。

5 会長は、総会開催時に、講演会等を行うことができる。

(細胞診専門医総務会)

第13条 この会は、日本臨床細胞学会春期大会及び秋期大会時に、細胞診専門医総務会を開催する。その他必要に応じて会長は臨時細胞診専門医総務会及び臨時細胞診専門医会総会を細胞診専門医会総務会の承認を経て開催することができる。

第5章 顧問

(顧問)

第14条 会長は、満65歳を超えた総務経験者のうち、細胞診専門医会に特に功績のあった者に対し顧問の称号を与えることができる。顧問は、細胞診専門医会、細胞診専門医総務会へ出席できるものとする。

第6章 会計

(事業計画・予算書)

第15条 この会の事業計画及びこれに伴う予算書は会長が作成し、毎会計年度開始前に細胞診専門医総務会で承認後、本法人理事会承認を受け、会計年度開始より3カ月以内に細胞診専門医会総会で報告する。

(事業報告・収支決算書)

第16条 この会の事業報告及び収支決算は、毎会計年度終了後、会長が事業報告書、収支決算書を作成し、細胞診専門医総務会で承認後、本法人理事会承認を受け、会計年度終了より3カ月以内に細胞診専門医会総会で報告する。

(会計年度)

第17条 この会の会計年度は、4月1日より翌年3月31日までとする。

第7章 細則の変更

(細則の変更)

第18条 この細則の変更は、細胞診専門医総務会の決定によって行われ、本法人理事会の承認及び細胞診専門医会総会の承認を経て発効する。

附 則

1. 当分の間、専門医会年会費2,000円、入会金2,000円、印鑑代1,000円を徴収する。
2. 年会費は、入会時及び更新時に5年分前納とする。
3. この施行細則は、公益法人の公益認定を受けた日から施行する。
4. 2013年(平成25年)6月2日 一部改定施行。
5. 2014年(平成26年)6月7日 一部改定施行。
6. 2018年(平成30年)3月10日 一部改定施行。
7. 2023年(令和5年)4月22日 一部改定施行。
8. 2025年(令和7年)3月1日 一部改定施行。

編集後記

ロシアによるウクライナ侵攻や、イスラエルとイスラム組織ハマスとの戦闘が続くパレスチナ・ガザ地区の情勢など、世界の平和は依然として遠い状況にあります。こうした国際情勢の影響により、食品をはじめとするあらゆる日用品の価格が高騰しています。さらに円安も重なり、パンやスナック菓子は内容量が半減するか、価格が倍近くに上昇するなど、消費者への影響が深刻化しています。加えて、ガソリンや米・野菜の価格も上昇し、家計への負担が一層増しています。

新型コロナウイルスの影響もあり、しばらく海外出張を控えていましたが、2025年5月にイタリア・フィレンツェで開催される第22回国際細胞学会への出席を検討し、旅行会社に見積もりを依頼しました。すると、10年前の約2倍の予算が必要であることがわかりました。ロシア上空を飛行できないため移動時間が長くなり、さらに燃油サーチャージの高騰も影響しているようです。このような状況では、学会への出席を見送るべきか迷ってしまいます。

さて、昨年度から表紙もカラーになった細胞診専門医会会報第61号をお届けします。毎号、興味深い内容が満載であり、ご寄稿いただいた諸先生方に心より御礼申し上げます。私が初めて国際学会で発表したのは、平成4年（1992年）にメルボルンで開催された第11回国際細胞学会でした。当時、私の師匠である柏村正道先生ご夫妻は、国際細胞学会のたびに野田定先生が企画・運営するツアーに参加されており、私もそのご縁で初めて参加させていただきました。その際、東岩井久先生ご夫妻と初めてお会いし、さらに4年後の第12回国際細胞学会（マドリッド）でも一緒する機会を得ました。東岩井先生は非常に気さくな方で、マドリッド空港で私のバッグが出てこなかった際も、優しくサポートしてくださったことが懐かしく思い出されます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

令和元年（2019年）度より、日本臨床細胞学会細胞診専門医委員会の担当理事を拝命しております。近年、細胞診専門医資格認定試験の合格者の中で、婦人科医の占める割合が極めて低くなっているのが現状です。若い婦人科医にとって、細胞診専門医よりも内視鏡技術認定医の方が魅力的に映るためかとも考えられますが、受験者数自体は大きく減少しておらず、例年30～40人程度で推移しているようです。平成25年（2013年）度より、試験は全科共通となりました。それ以降の12年間における受験者数は、病理医が1,082人、婦人科医が356人となっています。合格者数（合格率）は、病理医が973人（90%）、婦人科医が227人（64%）であり、婦人科医の合格者は年間約19名にとどまっています。細胞診専門医の資格を取得することで、細胞検査士や病理医と患者さんの背景を含めたディスカッションが可能となり、大変有意義であると考えます。また、診療の幅が広がる点でも大きな利点があるのではないのでしょうか。学会としてさまざまな広報活動が行われている中で、婦人科医の細胞診専門医を増やすためには、若手婦人科医に細胞診の魅力を伝えるなど、さまざまな対策を講じていく必要があると思われます。

（松浦 祐介）

投稿原稿募集

細胞診専門医会会員の投稿を歓迎致します。
細胞診専門医や細胞診断に関する提言、細胞診専門医相互の親睦を深める内容であれば、随筆など細胞診断に関係のない内容でも結構です。

原稿送付先：〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台
2-11-1 駿河台サンライズビル3階
公益社団法人日本臨床細胞学会

細胞診専門医会会報編集委員会

委員長：森谷 卓也
副委員長：松浦 祐介
委員：荒木 邦夫、大橋 隆治、齋藤 英子、藤原 寛行、湊 宏、村松 俊成、
森谷 鈴子
幹事：小塚 祐司